日本古義

四

和書門
類 一七二九七
號 二三七
函 八
架 五
冊

内閣文庫
和書
類 七二九七
號 九
冊 九
函 四
架 一

内閣文庫
舊號 和 17297
冊數 5 (4)
函號 154 230

国立公文書館
National Archives of Japan

日本古義巻之四

紀伊　高木尚三郎大伴正朝　述

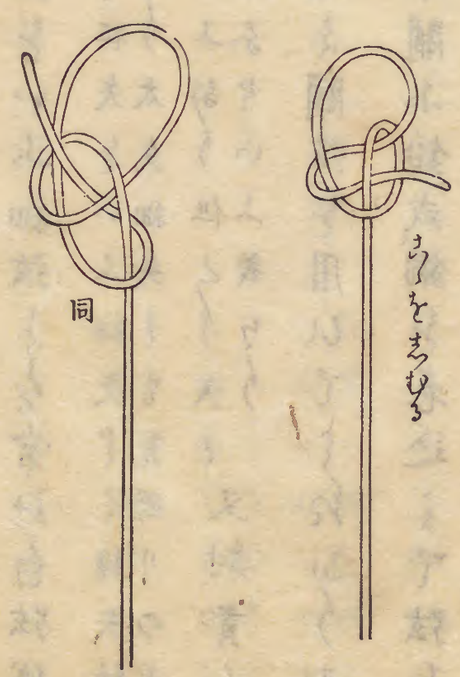
弦

四季艸尓法要錄鈔を引用せる程云ふ所乃關弦射事射ふる弦弦せるなるをいふとなる古書乃說とい〳〵ども其意違へるいふなり射ふる弦弦せくはなりけれども射ふる弦弦せる巻なるをふる射關弦といふを心得ふるなりふる弦といふそゝ如此違へる巻さ

浅草文庫
花迺家文庫

ある事を志免の關弦といふなり責め關弦といふを唯關弦乃事をいふなり苧を責める意也同書次ぎ條に軍陣聞書を引用されて云巻弦は常ぎ弦の上ぎ苧ふく太刀乃柄巻く如く違へ巻くを關弦といふ故にそいへども猶其心得違へりとて是メ弦ふして關弦あはあるべ唯一文字ふ關巻ふあるを關弦といふなり

上古角弓に弓糸用ひし弦輪左ふ圖を今れ世半弓ふ此弦輪を用ゐるなり



關弦を弦打輕撥に形く太矢ふ應じてふ又兩濕を厭ふ伏延縮おく切れふ事少く弓を張置く

太矢細矢操矢といふ名義

弦と喰ひもたれといふ

ふ倦きぬなり懸合を引なり曲尺なりて其直なり四分かと高く附きてなれなり是を張高く殊に先乃重れ根矢ふ用ゆきで格恰をなるなり太弦なは關弦をいふ細弦なを常ふ白弦ないふふ

太矢と色征矢をいふ細矢とも操矢的矢ふ類をいふなり太矢細矢とも篦廻りの大小輕重に遠遠り射ふやいふ義なり

但なり矢と又射貫く物を試る時ふを太を關弦を用ひてなれなり又矢乃熬を厭ひて中關ふ鉛或銅を巻込なて弦を重くなるもなり又弦を喰ひもたれといふも此理なり

本義

音金といふ事

射貫く物の事

塗弦白弦を用ゆる事

弦をめなせ重く形る故なり今ふ世ふ音金といふてかゝふ管を上關ふ入きて弦拍子なをなる愚ふ沙汰形るべし

射貫く物を試るふを拳を高く覘ひ心氣引を對をで押おろしうをく彈つべし活勢てなく射貫くなり引を詰矛にしを幅廣く吾力ふ少し強を底力ある引ふをなる最塗木ありかくをで矢働をなる鹿苑院殿村刮ふ引ふを笠懸を射なれし事なりけるを小笠原貞宗一御尋なりをしにせをふ御事ふと申なきて弦なるなり塗をなる射をひしとゆへをきを歩射ふを白木ふ引を用ひ騎射ふは塗引を用ゆるを

本義とする故なり是中古の例なり上古　朝廷
ふく射禮に用ひられ来りし角の弓は勿論丸木
弓も多くは塗木なり　御所の御弓ふを白木を
見えぶいげをも塗弓なり　太神宮の御弓を丹
塗を御弓なり

箙

箙は吾　國故實の重器なり夜奈久比（ヤナグヒ）も衣比良（エビラ）
と本一ッの器なり其製と名を別けく公家ふまは
胡籙といひ武家にて箙といふ形衣比良を

曾比良（ソビラ）といふ詞の轉（ウツ）ひなるなり靫（ユギ）を背ふ（ソビラ）脊平（セビラ）なり
負ふをみかをそ背（ソビラ）の靫といふ詞を省きて曾比
良といひしを又詞轉ひく衣比良といふ形夜
奈久比を蒲靫（ヤナギユキ）蒲柳なりといふを約めギユをグ下ギをビ用
多の詞にして胡籙といひ箙といふを靫の一ッを
いふなり由岐をウケと訓むなり矢を受るを
といふ詞なり矢受の箱或根受革などいふ例れ
ア古代には箙を夜奈久比なども胡籙は衣比良と
もいひしなり胡籙を公家ふ用ひらをて征戰の

場あゝ用ひ次古代ゝは衛府守衛ゝ武官束帯乃
上ゝ弓箭を帯ゝ事常例あり是吾　神武ゝ國
風儼然ゝる弓矢の禮容ゝ遺風といふべゝ既ゝ
鎌倉殿ゝ代ゝ平胡籙ゝ矢ゝ丸緒附け
ゝゝ東國乃武士を知らぎゝゝに平家ゝ
侍武藤小次郎資頼といふゝの其事ゝ知ゝ
ゝゝ調ひ進らゝ其罪ゝるゝゝゝ東鑑ゝ
見えゝゝ

年中行事

朝覲行幸供奉

胡籙負いるる圖

古代武家にて製作せし逆頬箙（サカツラ）は猪の頬皮以て逆さまにして根受を包みある故に逆頬箙といふなり此猪の頬皮或は熊の皮にて根受を包み始めしは頼義朝臣奥州征伐の頃よりの製なり此逆頬箙を造出してより葛箙をも作りて箙と混し誤りていひ習はしあり總て物の名を唯自然にいひ習はしたるものなれば敦き矢をうくるものなれば受といひ葛にて造りたれば葛えびらといひ逆頬にて造りたれば逆頬箙と

いふが如く皆其物の形によりて自然に其物の名を呼習はし次々になりて人生まれて上を見て天といひ下を見て地と知る天が天とも地が地ともいはれぬことも唯自然の理にして萬物皆是に倣へり是もとよりなる言葉は吾　國の遺風なり箙羽壺を猪の皮にて包み或は蟇股鋒根などにも透に猪の目形用ひて猪を賞せられし事も吾　國の古例なり攝津國能勢郡木代村所傳に云古へ　神功皇后三韓を征し御凱陣の時　皇后太子（應神天皇）を

供奉し給ふ事香坂王（按るに仲哀天皇の先后大仲姫の王子）
（麁坂王）
なりしかとい〳〵ふ無道の人ありて國家を奪ひむと
て軍勢を催ふし皇后を滅さむかゝて所〳〵にて
挑ひ戦ひ此山中ふ追驅奉り既に弑し奉らむと
する處に猪多く出て香坂王ふ飛びかゝる王詮
方なくして大木に捎り昇る猪ふを見て其木
の根を穿ち堀りて打倒し終に香坂王ふ喰殺し
永く是を亡ぼし奉ふ於て皇后太子共に
危難を免れを給ふられん天下静まりて後

應神天皇に御代〳〵毎年亥の月亥の日を祝し
給ひ御吉例〳〵を永く御玄猪に供御調貢をべ
き　詔ありて代〳〵に　帝〳〵變らぬ三ッの亥〳〵を
ふ捧ぎ奉れなりをいふ其御例今の世に至り
てかゝる攝津國能勢郡木代村切畑村より毎
年十月亥の日の前日未の刻に　禁裏〳〵御玄猪
の餌を調貢し奉る是猪を賞ぜる古義なり
籠を鎌倉殿に代の始めの頃までい大將〳〵士
に至るまで皆籠を負ひ鎌倉殿に代に殊

尻籠の始

も此器を重んじあるひ將軍家の御箙を御調度と稱せしゝて箙を大將の外猥に是を負ざる士も憚ゝゝ皆尻籠に負ひしゝ尻籠は箙の畧製にて古代に箙は懸緒腰緒矢束弦袋等皆仕附ふして畳紙を油紙に包みゝゝ小硯と共に張に矢の後ふ立置を常なりゝ故に矢立に名遺をり浮田一蕙藏を

矢立小硯に圖左に見也

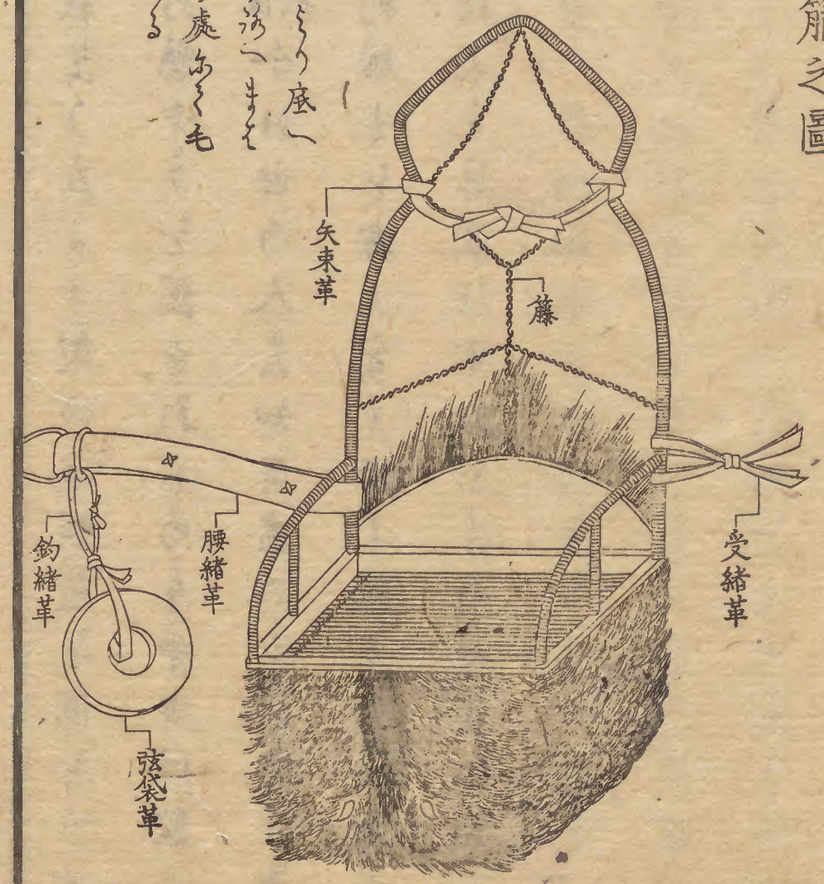
如是古製は急用に便利なりゝ古人其器を製をれゝは用ひ試ゝて其利用に考へ製しあるゝに古製あを一定の法式

扨し是古義なりゝ左に古製の逆頰箙を圖をり其次に上緒に懸やうを圖をれゝものを中古に製に

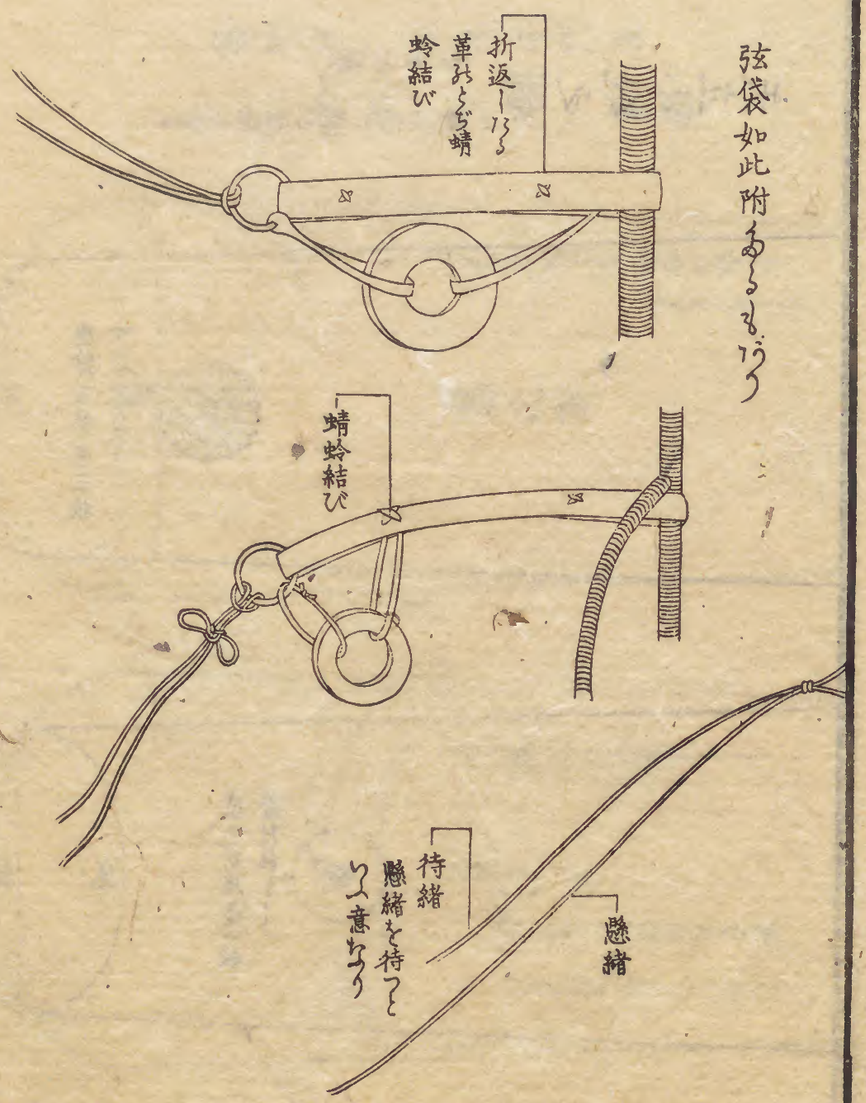
して鹿苑院殿乃代今に世乃人も知る處のゝれなり古製と其便利勝劣を考ふ重し但し箙をいつの頃ふ製作をなゝを目方に重くなりぬやうに製をへしなる案

逆頬籠之圖

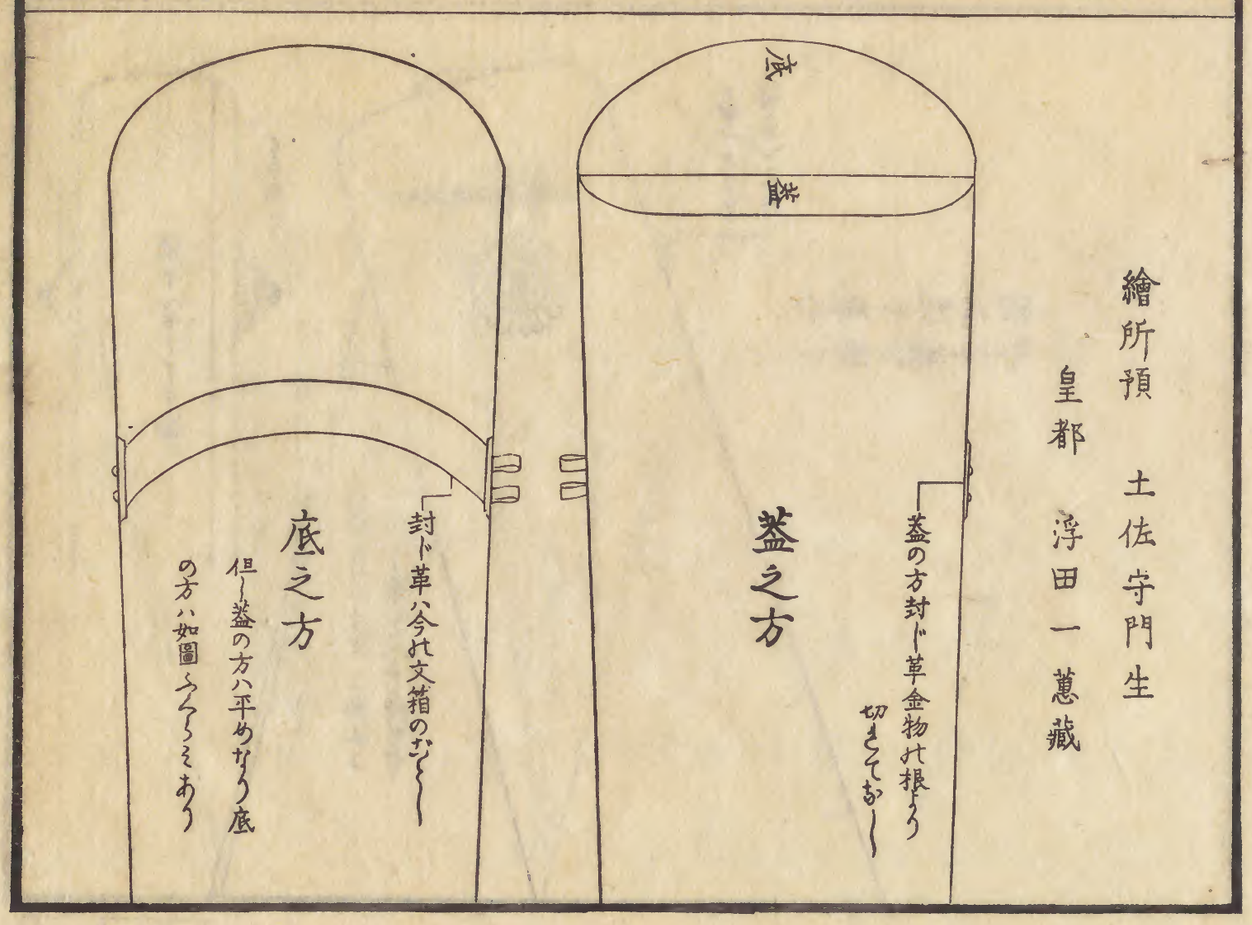
猪の頬皮前の方底へ
ゆりつけ後へまた
ひて山形の處あり毛
の方逆とする



弦袋如此附あるもの

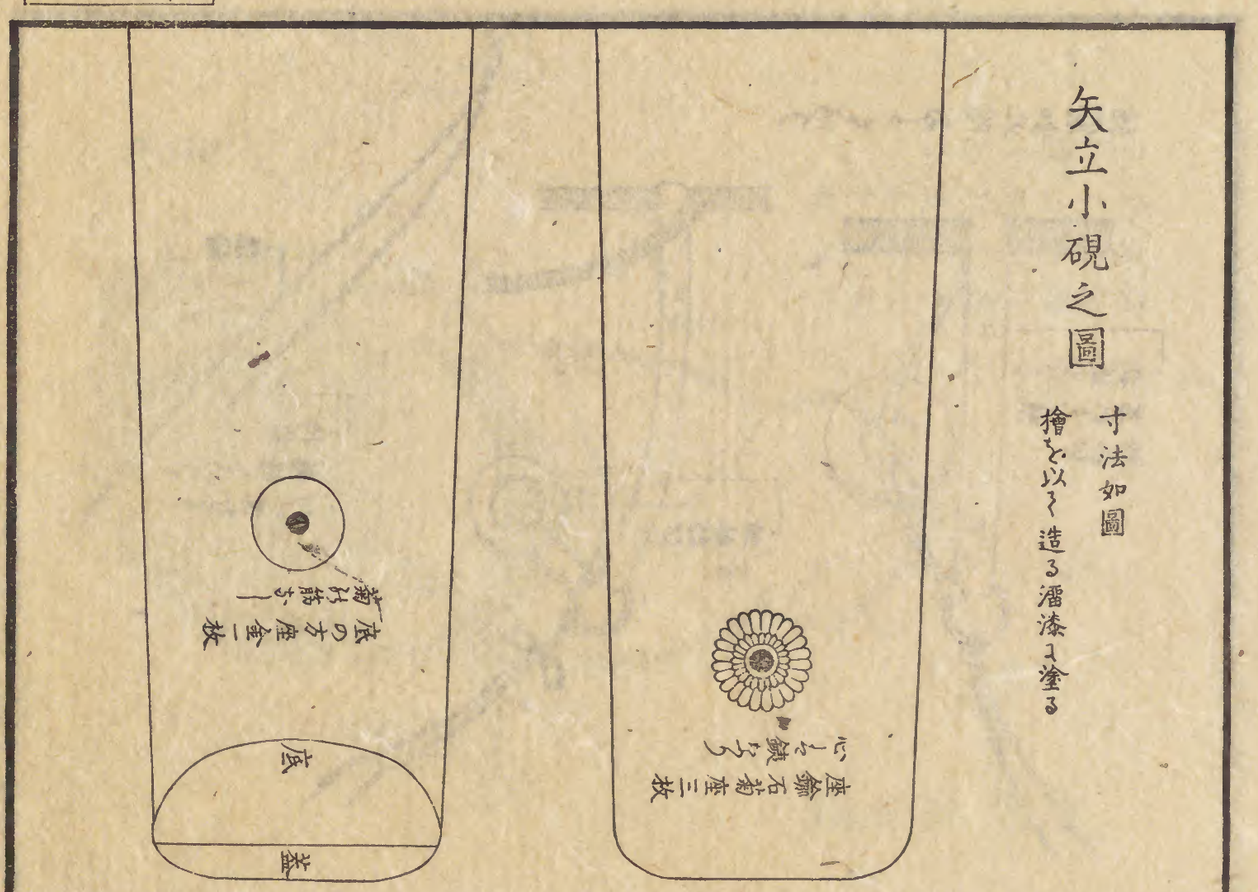


繪所預　土佐守門生
皇都　浮田一蕙藏

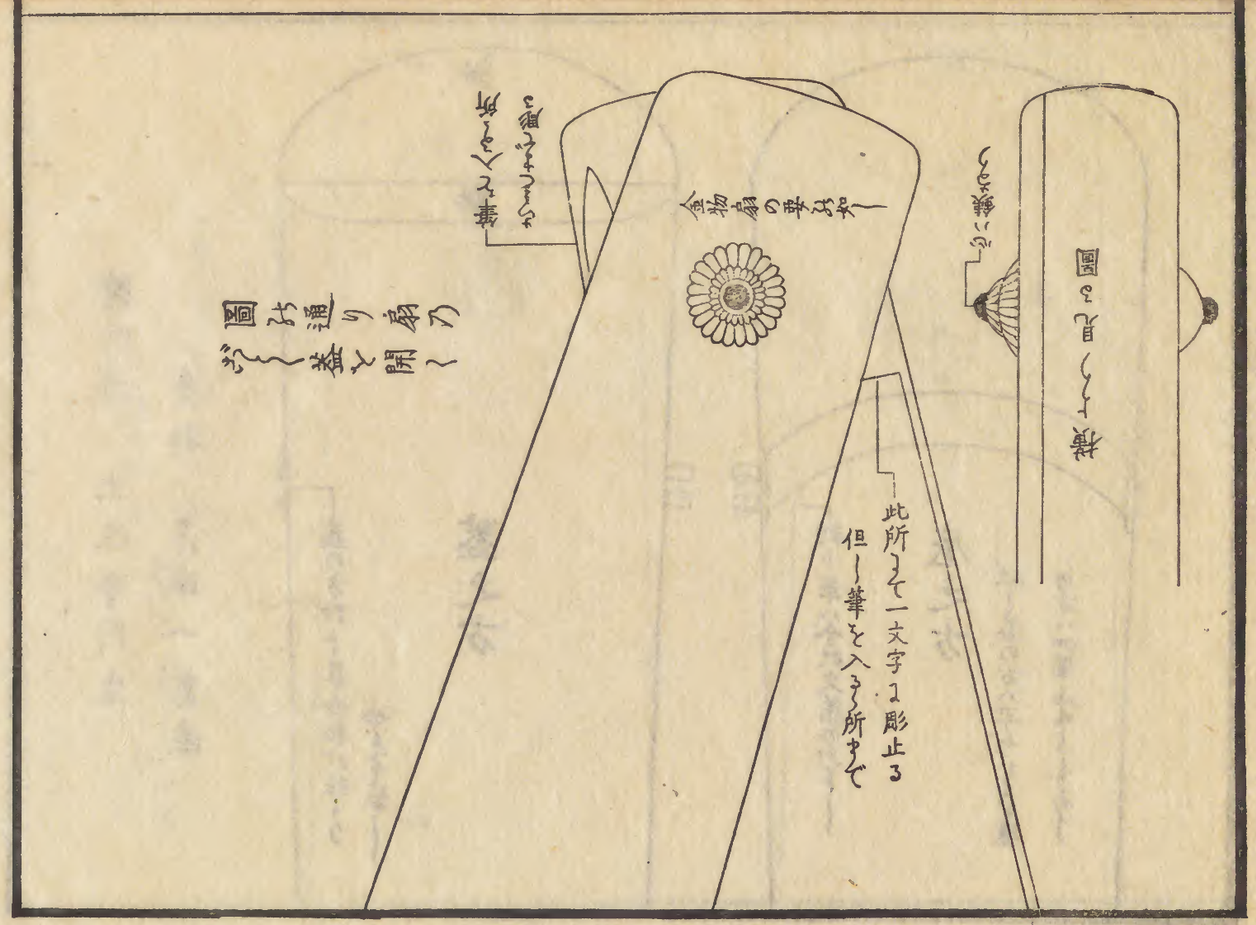


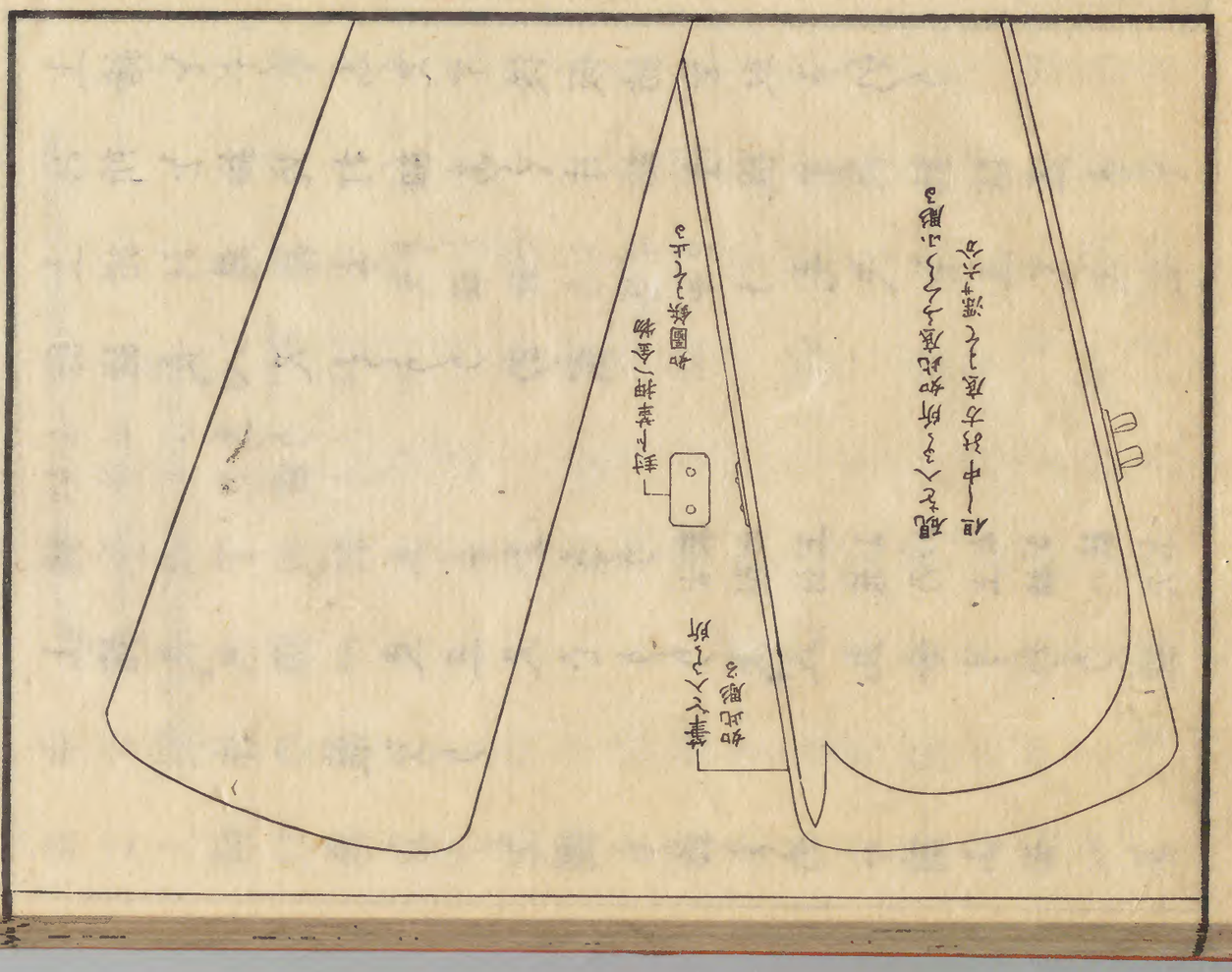
矢立小硯之圖

寸法如圖
檜を以て造る漆塗



国立公文書館 National Archives of Japan

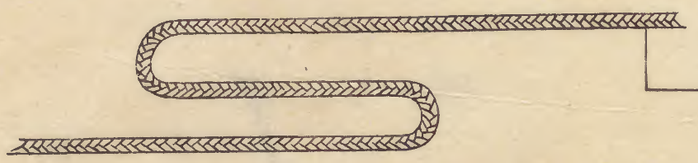

横より見る図
ぐりの横さう
一六の華の
金物彫
此所にて一文字に彫止る
但し華を入る所まで
華を入る所
ぐりとなる所
入る通り
開く華
ぐり
図


華を入る所
彫出す
鋲
鋲の華押の金物
彫出す図

表帯とりの名義

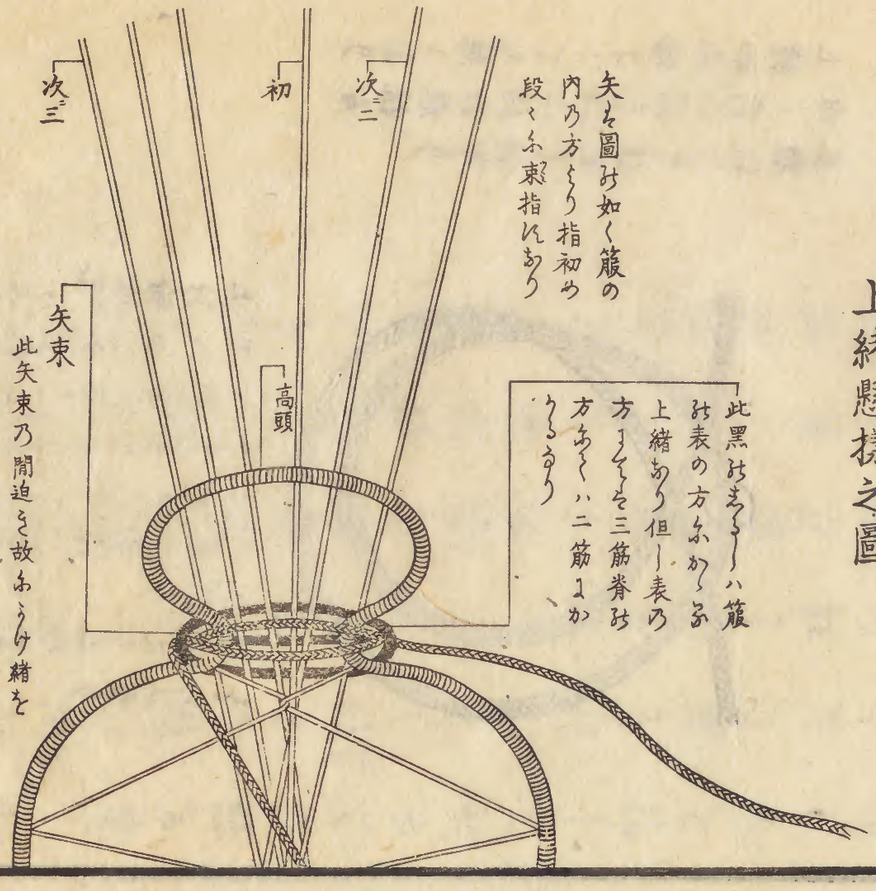
矢纏緒のかけやうとい事

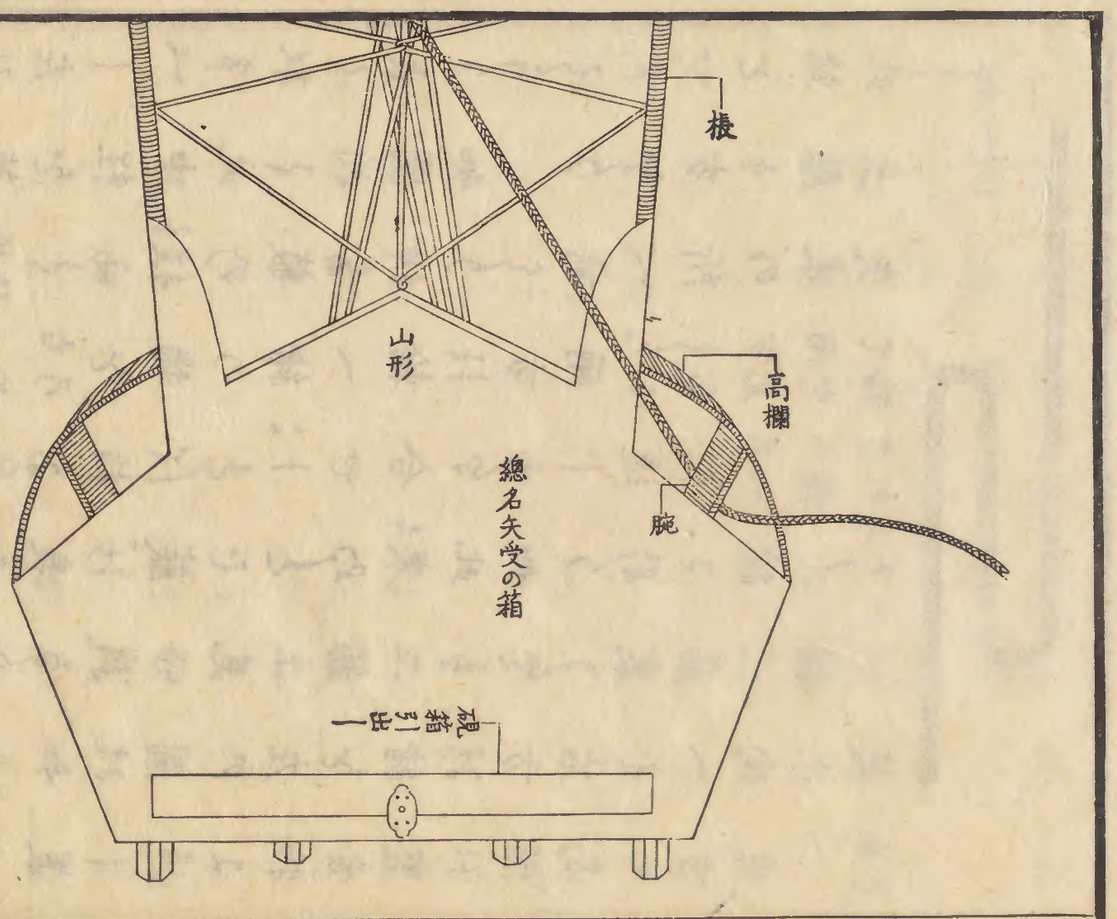
左より上緒より懸ゆるを圖するものを前ふ云へ
中古製作の箙なり
上緒長サ大概一丈三尺なり太サ八九分まるり練
繰を以て四ッ打ふもれるり古製より箙の上緒ハ矢束の上よりかくる故ふ
表帯又上緒ともいふなり
腰緒長八尺ぐらり形如
上緒より懸揉る矢纏緒の懸やう先矢を立て矢束
より所を細れ打紐ふ〳〵片結より假まれ結び置るて
上緒をるる〳〵ちえて後假結を取るれり



此端を一尺ぐらり長く取るべし左より肩
ふ懸る方なり　如圖折て此中程を箙の
矢束の所へ前ふり押當箙の後名ふく折目後より
て兩方〳〵を輪ゆ見ゆる兩方より輪へ緒の端を右左の輪へ
左ハ右の輪へ引通しゆゆ合セトまば指あゆ矢
〳〵締る形如此束ゆまで箙より表まて
ハ緒三筋裏まて二筋ふ見ゆれるり扣
箙ふ向へで右方より緒を左の圖ハ如く箙ふ
向へで左方の高欄より竪金物より通し置べし

上緒懸様之圖


矢を圖の如く籏の内乃方くり指初め段々ふ束指けあり
次三
初
次二
矢束
此矢束乃間迫を故ふうけ緒を食ましむる意ゆゑ此所を革にて少し巻ひくびくを淺くして緒をうけへし
高頭
此黒ぬきくハ籏の表の方ふかくふ上緒あり但し表乃方くくそ三筋脊の方ふくハ二筋ずかうるあり

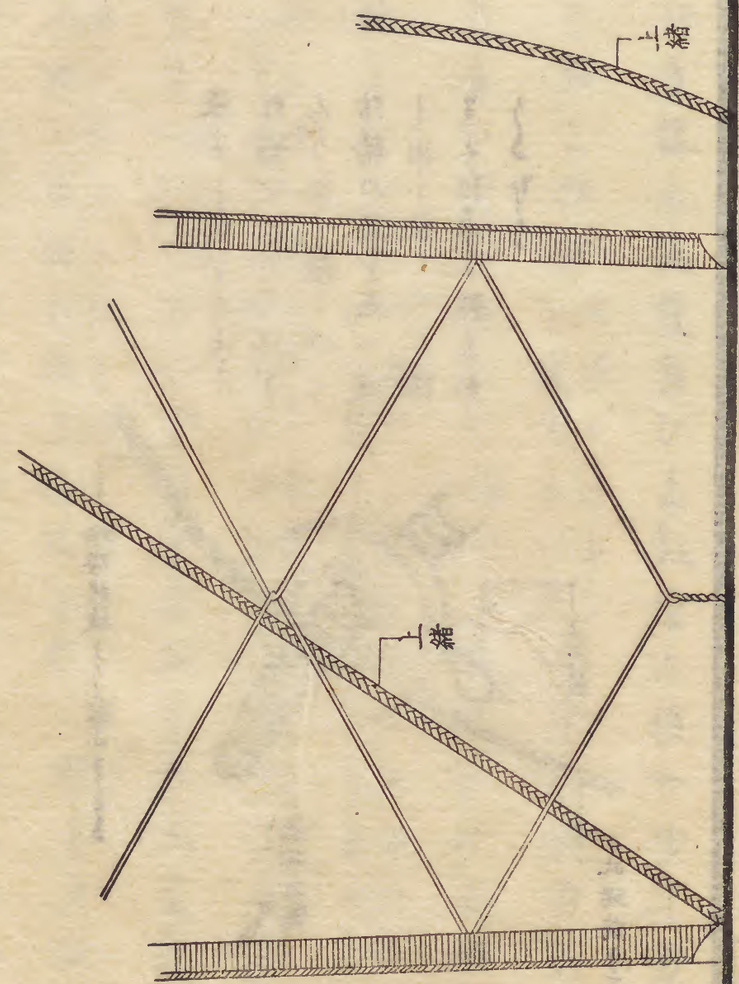

棧
山形
高欄
總名矢受の箱
腕
硯箱
一氏

上緒如此輪にしても懸るなり
但し前ふ圖ニ上緒ヲ懸揺を
早懸にして便利なれなり

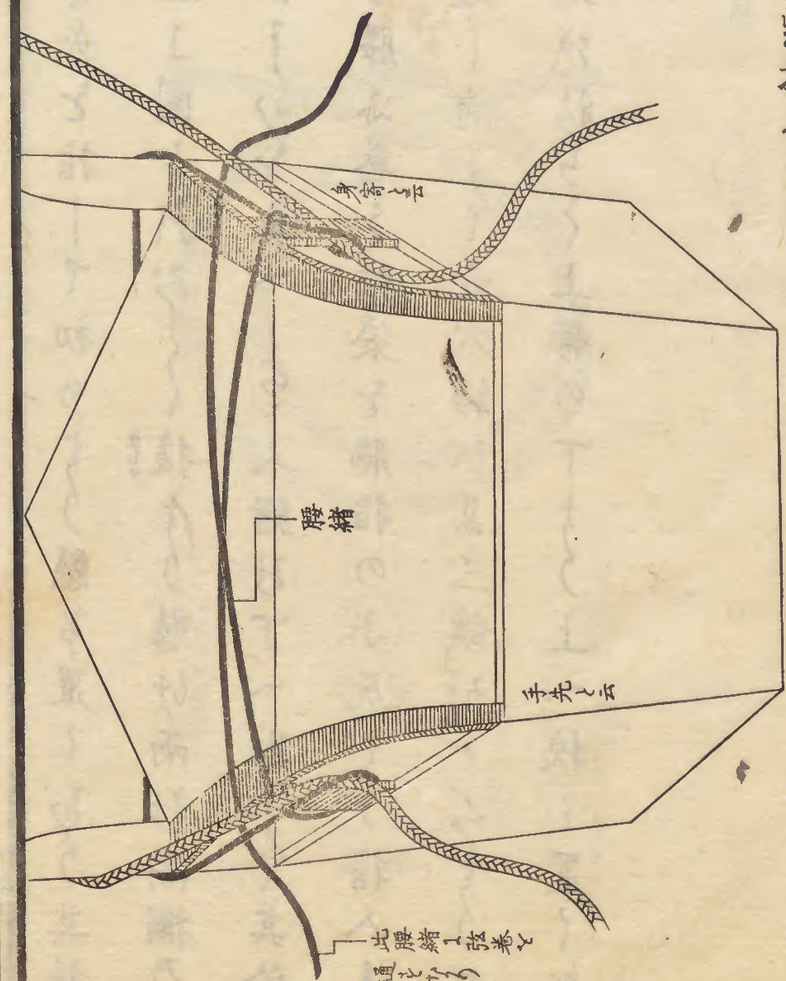
上ヲ輪の印を上より
下乃印ニ合をれを上
二筋下三筋とするなり
をもをとりもを
うけもるなり尤緒
ハ前三筋後二筋とな
るなり
但しうもあハ矢束
をいとなり

腰緒懸やうの事

腰緒を矢を指して初めより懸ものを置くなり其懸
揺を左ニ圖を乾ぶ後より懸け兩ヲ高欄乃
中の柱にかを上へとを又緒ヲ下へ取ヲを其餘
を兩方腰ふ巻を弦袋を脇指の小尻より指入を
緒を通し前にして壺穴結びふ三鎖かとくをして
緒ヲ端ヲ移ぶく上帯の下より上へ挾ミ置くなり
壺

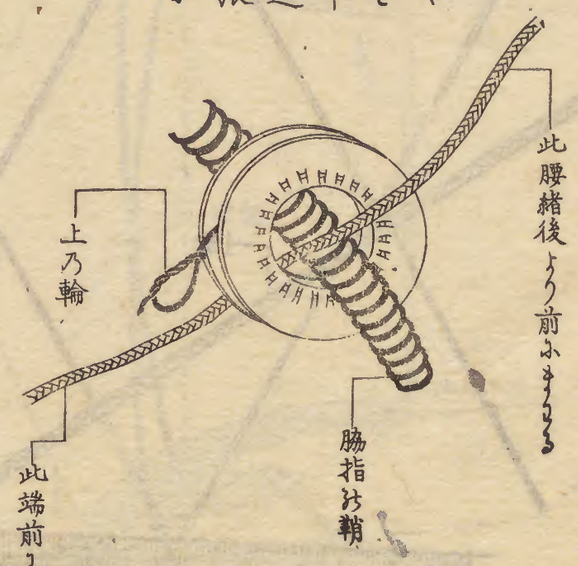


腰緒懸撓之圖



弦巻附撓之圖

張るゝれを右ゟ弦輪をかけて弦をくり出し張る但し弦輪ハ裏を表へ返し出し置くべし張るゝれ直ゝ弥ふかるもの



箙負撓之事

箙骨といふ本義

箙ゟ負撓を矢籠負ひ為れ意ふ後へ少しゟびゝ右の脇ゟ押當此附るゟ箙骨といふ圖をゟ通りゟ緒を左乃肩を前へ越ゟ箙ゟ向へを右の方ハ高爛乃竪金物ゟかをゟ此懸やう緒を假てふ緒の末を引けで解るゟうにしゟ置けで片方ゟ緒を後へ廻をゟち箙後へまゝゝびゝゝ勝手ゟれちゟ扨最初ふ金物を通し半ゟ箙ゟ向へを左の方ゟ竪金物ゟ出為れ緒ハ腰緒を懸るゟれを右ゟ圖をゟ如く上緒を腰緒ゟ輪ふ通ハなゝ背ゟ左ゟ脇を腰の物ハ下を廻し前へ取て左ゟ肩を越して金物を通し為れ緒の末ゟ兩方乃緒を一ッふ左ゟ

手ゐ持ち右ゐ手を箙を勝手ゑ程ゑ押上げ箙
ゐ後を身ゑ引ゑを當ゆゑ合ゆゑ結ゑ一ッ緒
ゑ其上ゑ片ゑれゑ結び其ゑ方へ今一方の緒を
又片ゑ方ゑ通し初めゑ方に通ゐ緒乃
先を引けで後ゑ入ゆ結ゑ方ゑ結ゑ壺穴ゑ
結び如此段ゑ方ゑ緒ゐ合せ次
第ゑ方ゑ合せ其くゑ
ゑ方ゑ上帯具足ゑ下ゑ
上へ挟ゑ置くゑ　右ゐ通りゑ搦みゑれで

馬上ゑ弓納め方ゑ本義

箙ゑ指ゐ矢の數ゐ本義

負矢二本三本抜出ゑ分ゑ殘ゑ矢乃
重りゑ箙少ゑ下る心地ゑ矢束ゑ
矢の緩ゑ事ゑ又箙下ゑ持ゑ弓を
で弦を馬ゐ首の方へ成ゑ左乃カ革ゐ間へ弦ゐ
上ゑ向りて挟ゑ置く是ゑ馬上ゑ弓ゐ納めゑ上帯ゑ挟
みゑ上緒ゐ方ゑ處を引出ゑ左の手ゑ
て扣へ右乃手ゑ前ゐ通り箙を押上げゑ
て合を幾度ゑ上帯ゑ挟ひ
箙ゑ指次矢ゐ數ゑ十六二十廿五本ゑ右三ッの

眞代矢といふ事

負征矢といふ事

内を用ゆる物なり此内に表指二本ありて御所乃御平胡籙に表指鳴鏑二本指はべり御隨身は壺胡籙には上指鳴鏑一本あり此差別あり尤鏑を指次時は鋒矢をば指さず孰も外向内向二本あり又鏑矢を眞代矢といふ蟇股を鏑乃かたに指次時は是を眞の矢とも云ふなり上矢多手先は方に雙べて指を射る大將は主の負征矢負征矢とは箙矢籠に指はべり射捨乃征矢乃ゐるゆゑに負征矢と別に云ふあり をむざと射捨るなれば乃ちゆゑに矢は數十六ゐ二十本に過ぐべからず負征矢多く指して利なしゑ

箙に矢を殘はべりといふ本義

用前乃矢指やうの本義

ツミ指といふ本義

飾置く箙に矢指様の事

しかれ運命盡きて討死せんも箙に矢を殘はべりとい一ゑを死を惜まざる乃聞えあり

用前に時の征矢乃指ゑを前に上緒懸やうは處に圖せる如く矢を一束に立るなり（一束に立るといふ）

ゑ二本三本は組違へ箙の内に方へなせる乃ゐ根乃方開かぬ乃ゐにて手懸よりやうに根配まに指をべし根配りは櫛形あり尤上指二本は手先に角に指

ゑなり是をは指といふはみばゑは積重ねて指はべるといふ義なり（束指ゑなり）

常に飾に置く時に矢の指やうを左に圖せる如

く矢配を入れ征矢の内乃方身寄に楊枝陰劔尻おゞの副矢に指初めて木鋒鈍矢の二を其後征矢を二本三本ゞ組にて指納めるゝ法にて手先の角に上指を指て案但し鏑矢又は蟇股ふくも根を抜きて篦を矢配に入れ後に根を指をべし

鞭を紙撚にて結付る事

鞭を取柄を箱の内へ入れ紙にて手先の方の蔓乃肩に結附置くあり騎馬の時に鞭を腕にかゝる故に當分の納先撓ありを考事伐見を紙

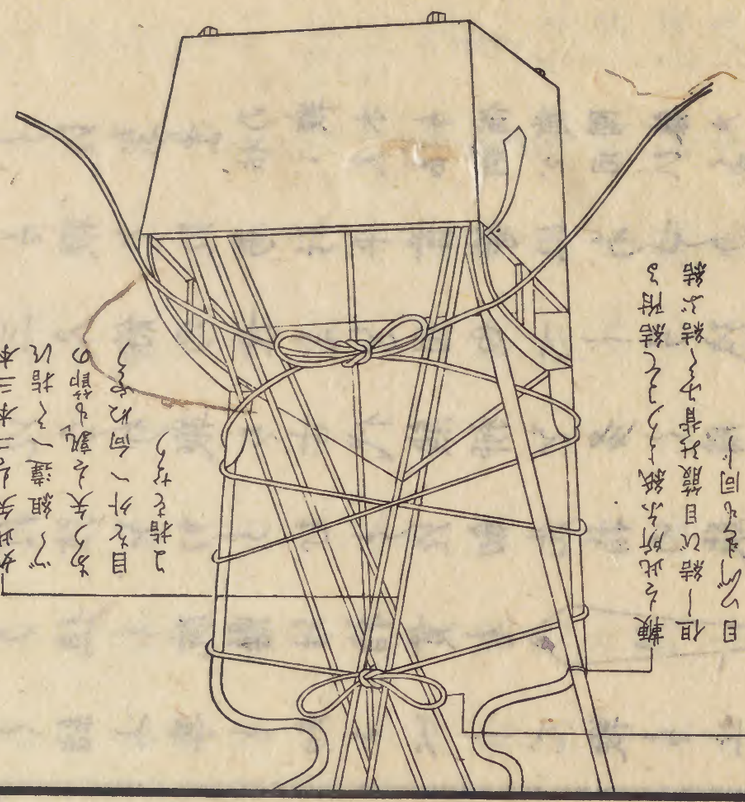
鞭の指貫の事

鞭の製作

よりふくゝ結ふ事と知るべし尤鞭を上緒乃外に指をかり但し腕懸の指貫を圖の如く

に附れば弦をかゝむるに劔先指の腹に障らざるよりて鞭を古代熊柳を多く用ひあり但し鞭を三尺餘乃長さを用ひべし引伐引込む時短き鞭を鞭を馬の平首等にあるゝ或左へ越して佐ゝ木盛綱が用ひあり熊柳乃鞭木を備前國藤戸に今に存せり

国立公文書館
National Archives of Japan

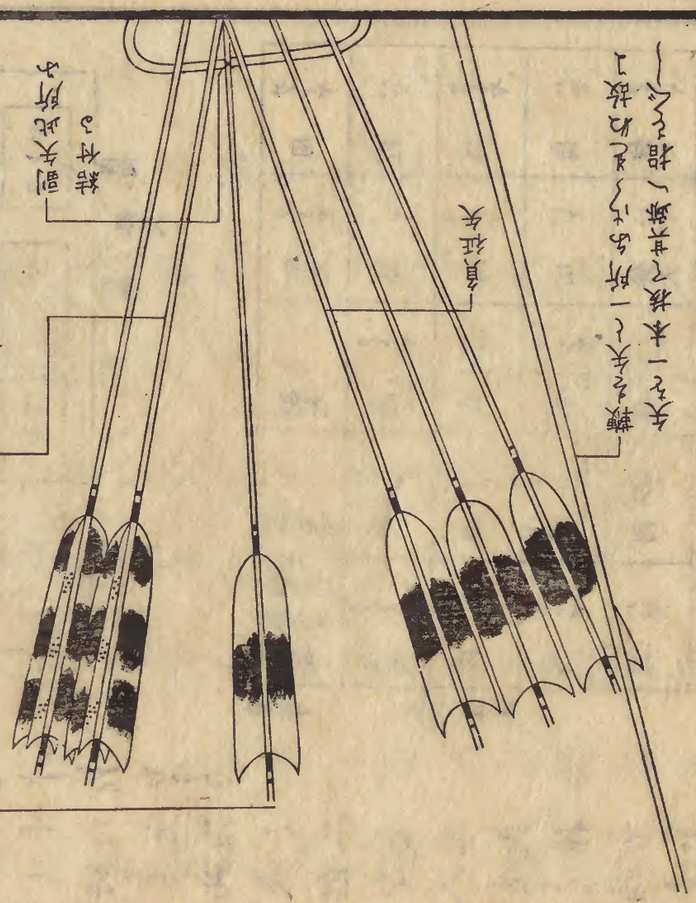


圖の様矢ゟ時〻置鍋ゟ常

鞆結分輪ニ小極を付け矢束の所ニ結付う但し飾結ハ上結を用ひて十ハかやうに矢ぶかし一ツやくとも見しそくこと

鞆とゝ所ゟ紙ニ結付う但し結目ハ能ゝ強ク結ぶ結ゞ結ぶ結目ゟ同し

外ゟ三ツ目ゟ結ぶ



副矢と高頭ノ兼合黒漆ゟ附く〻細く敷て結十五矢ノ内ゟ二ツ十六矢ゟ同し

上指二本雙ゝて廉ゟ矢丈ノ光のゟ指ゟ十二十五矢の内ゟ十六矢ノ同し

副矢此所ゟ結付う

鞆とゝ矢ゝ一所ゟゝ見ゟ故ニ矢を一本挿て共脇ゝ指ゝ〻

常ふ飾ヲ置く時も此矢配を入まゝ指をなり
但し矢配を十六矢指と二十五矢指とを二枚
製へ置きてよれをもち

十六矢

ヤハ	ヤトヲ	副矢	ヤトヲ鞭
ヤハ	ヤトヲ	ヤハ	ヤトヲ
ヤハ	ヤトヲ	ヤハ	ヤトヲ
ヤハ	ヤトヲ	ヤハ	ヤトヲ

内向　鋒矢　外向

身寄　二十五矢

木鋒 鏃矢の類を指	征矢	同	同	同
右に同	同	同	同	同
副矢	同	同	同	同
	ヲトヤ	ハヤ	ヲトヤ	ハヤ
征矢	同	同	同	鋒矢
ヲトヤ	ハヤ	ヲトヤ	ハヤ	ハヤ
同	同	同	同	鋒矢
ヲトヤ	ハヤ	ヲトヤ	ハヤ	ヲトヤ

鏑矢又蟇股を指し時ハ鋒矢を指さば

副矢とハ事

古代箙ふ指を征矢ふ副矢を上指の外形し是天
の羽羽矢ふ八目乃鳴鏑を副持といふ古義に據
て征矢ふ鏑矢を指副るなり故に副矢をいふを
表指れ事なり楊枝陰形ど城指して副矢といひ

中指とハ事

鋒矢を中指をいふ事に中古なりふ式鹿苑院殿乃代に
もゝ古義にいふ上指をいふ對して征矢を
中指といふなり又鏃矢を陣中ふゝ土居山岸に
ても射付ゝて手力を試ふに用ひ木鋒を矢文或
遠矢れどふ用ゆれふ尻籠羽壺ふ一手を指

して嗜む矢ありとい[illegible]を中古[illegible]

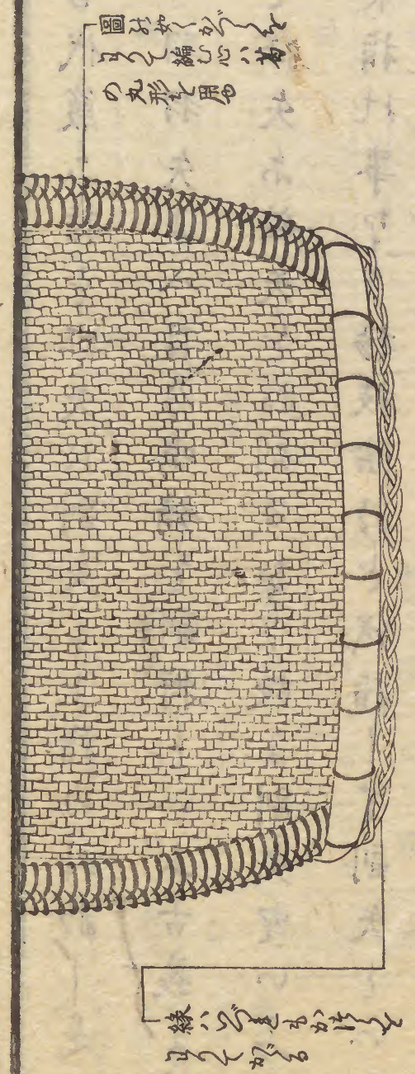
[illegible]

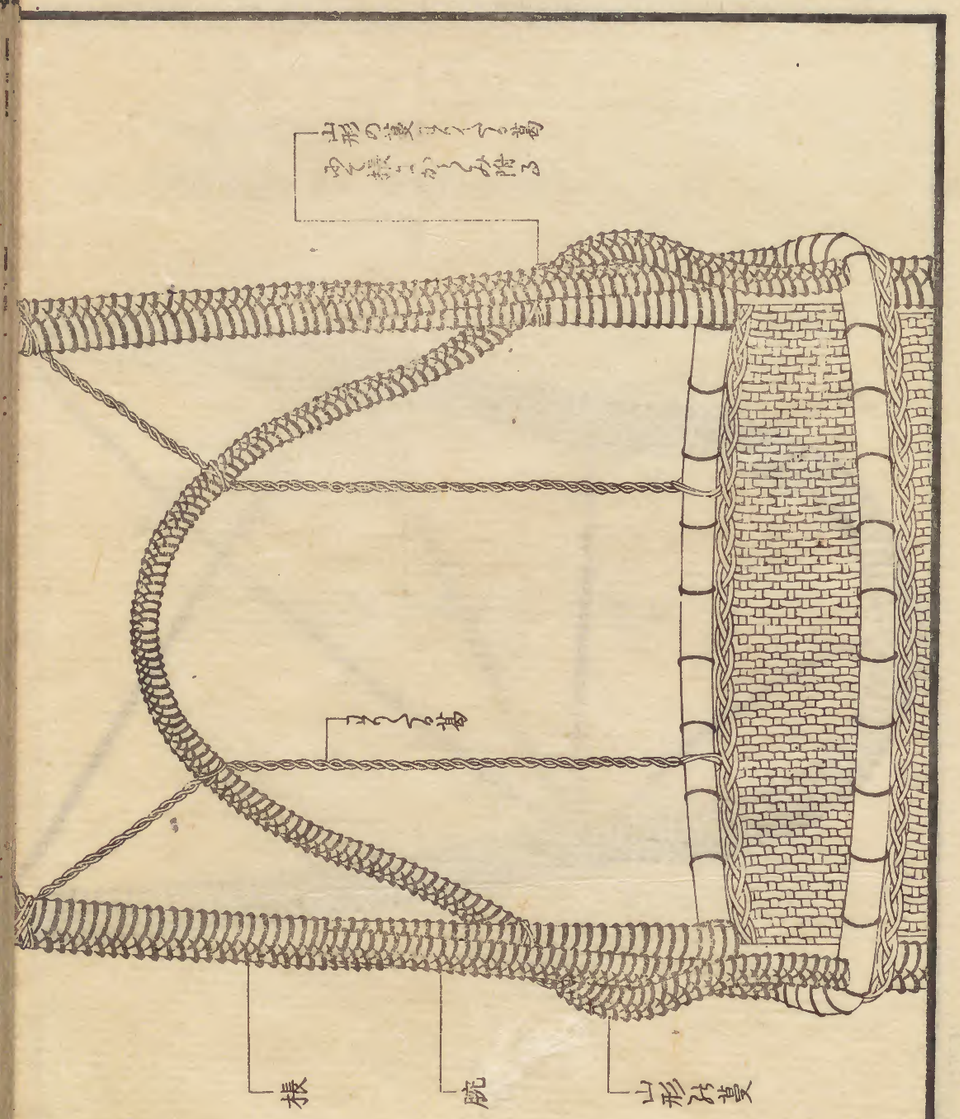
御所御隨身 葛胡籙之圖

大サ如圖

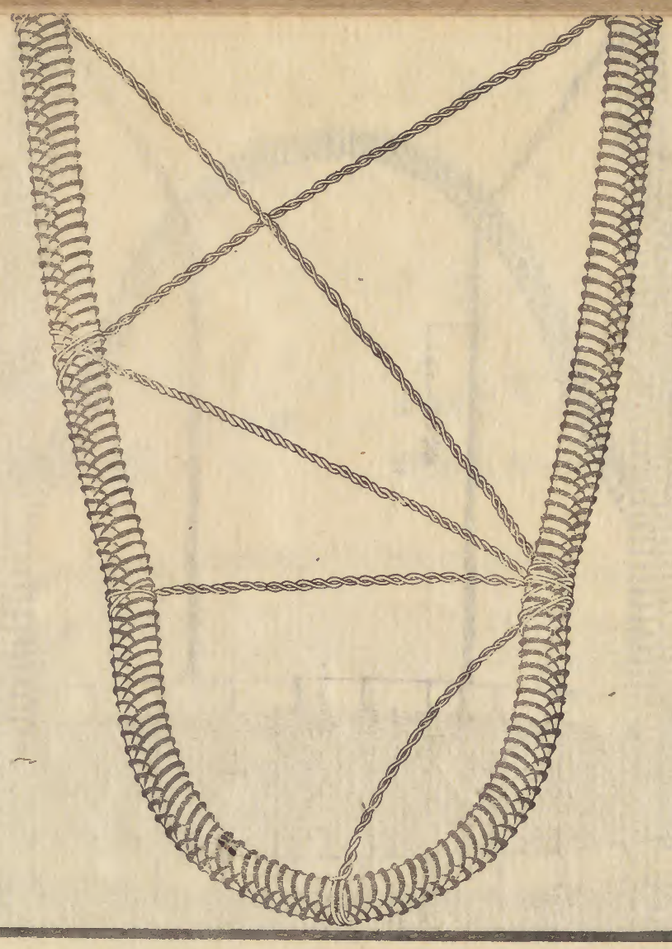
黒葛長藤かりを以て造る

總金粉塗又黒塗もあり





国立公文書館
National Archives of Japan

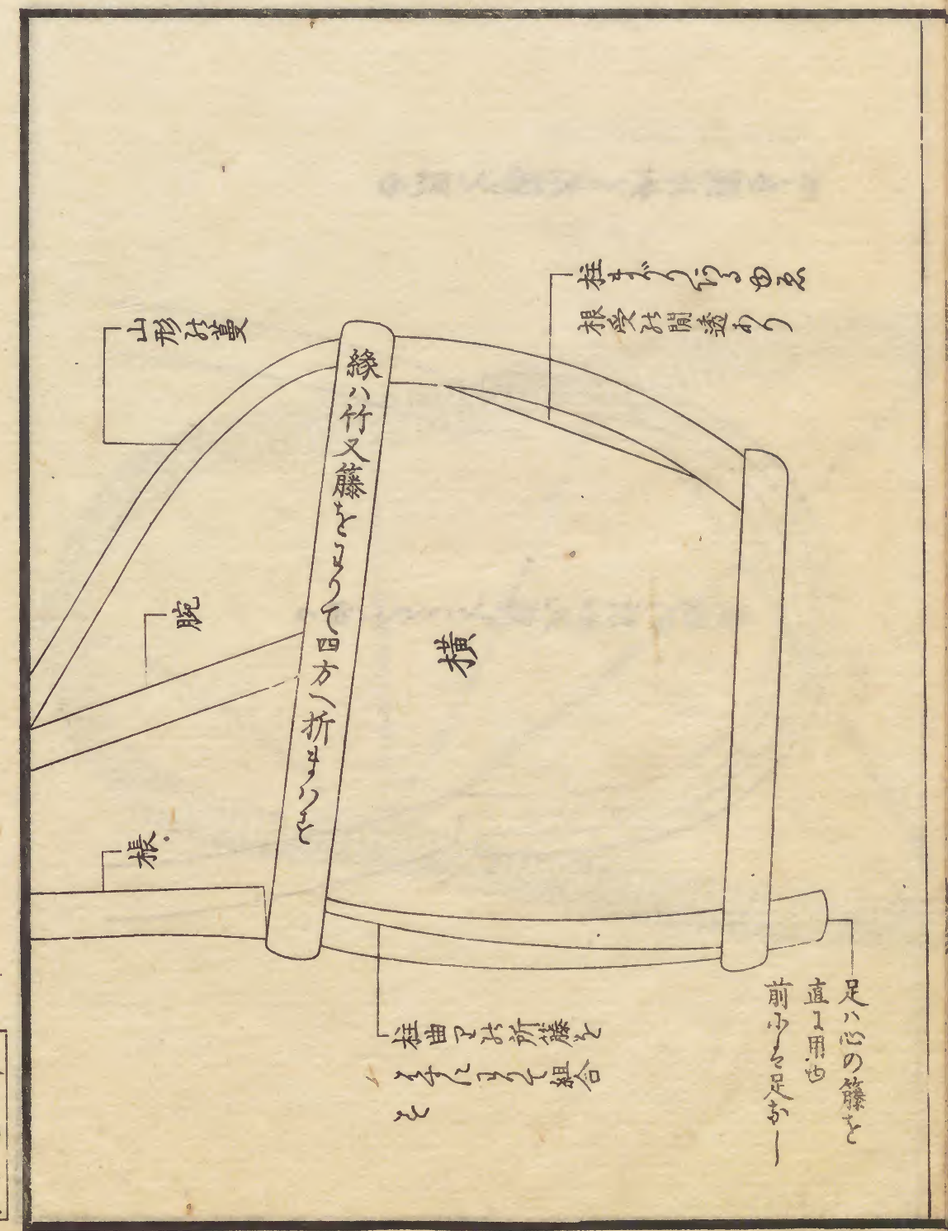


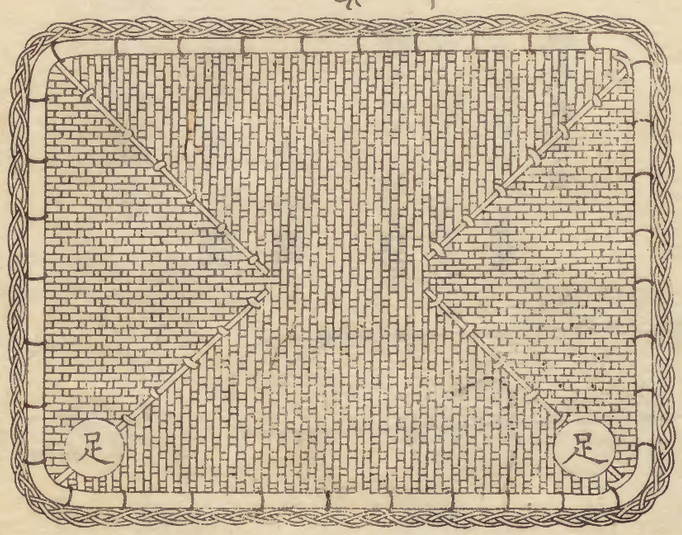
根ヒ形兼結ひ方ノ図
ひなりこゝにてこゝを結ミ
結ノ条ノ

日本古典全集

高頭乃所如ク丸藤ヲうりて曲る

心ゝ圖ゝ所如ク丸藤ヲ用ル





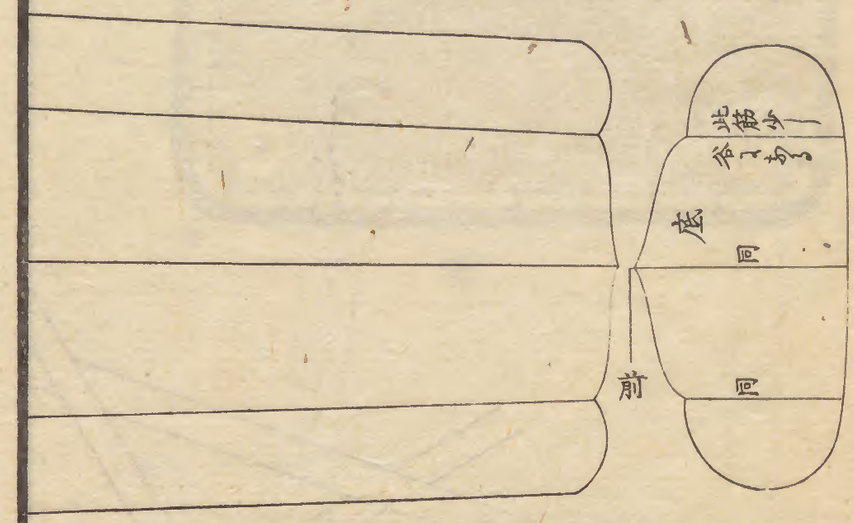
同底之圖

御所御隨身

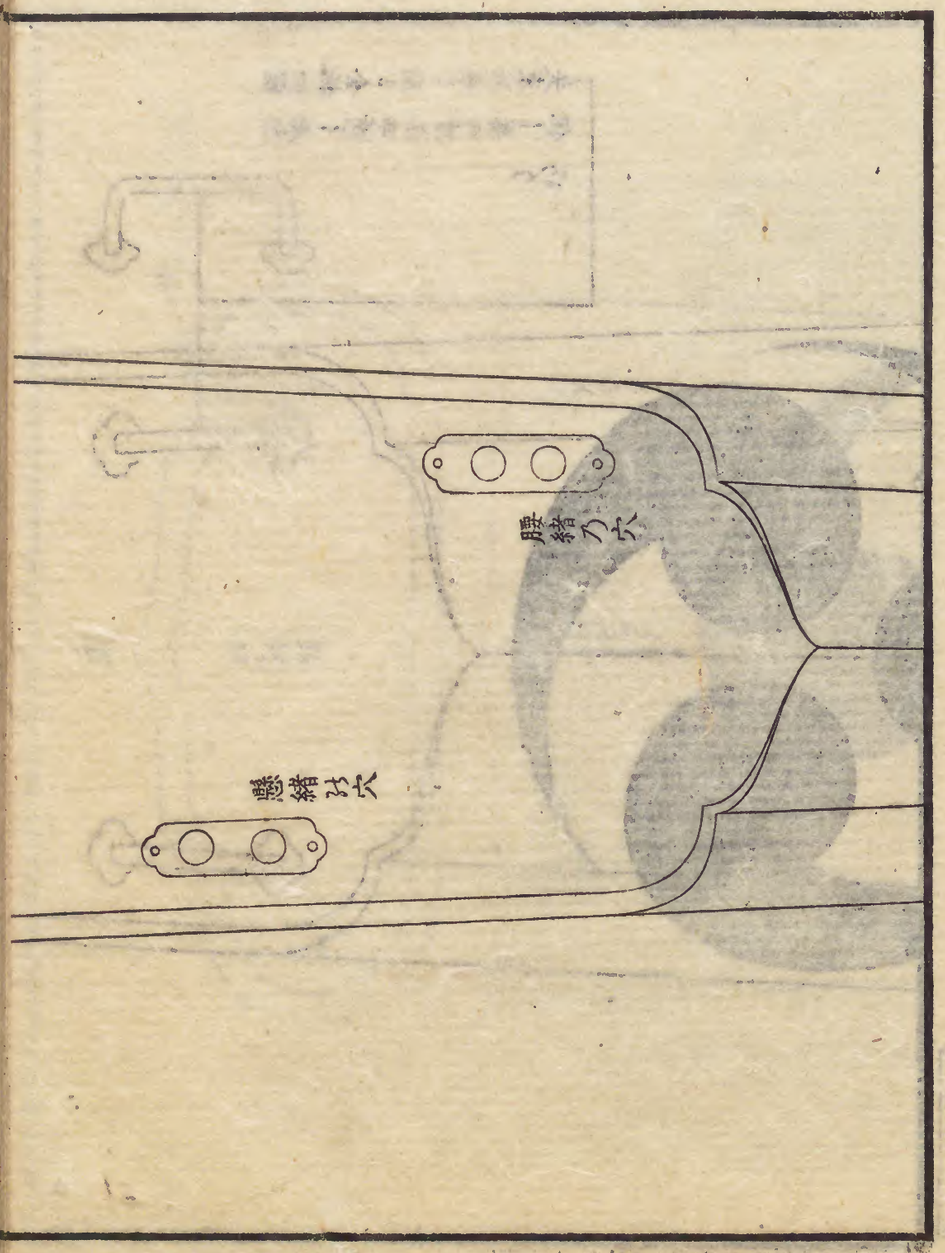
壺胡籙之圖

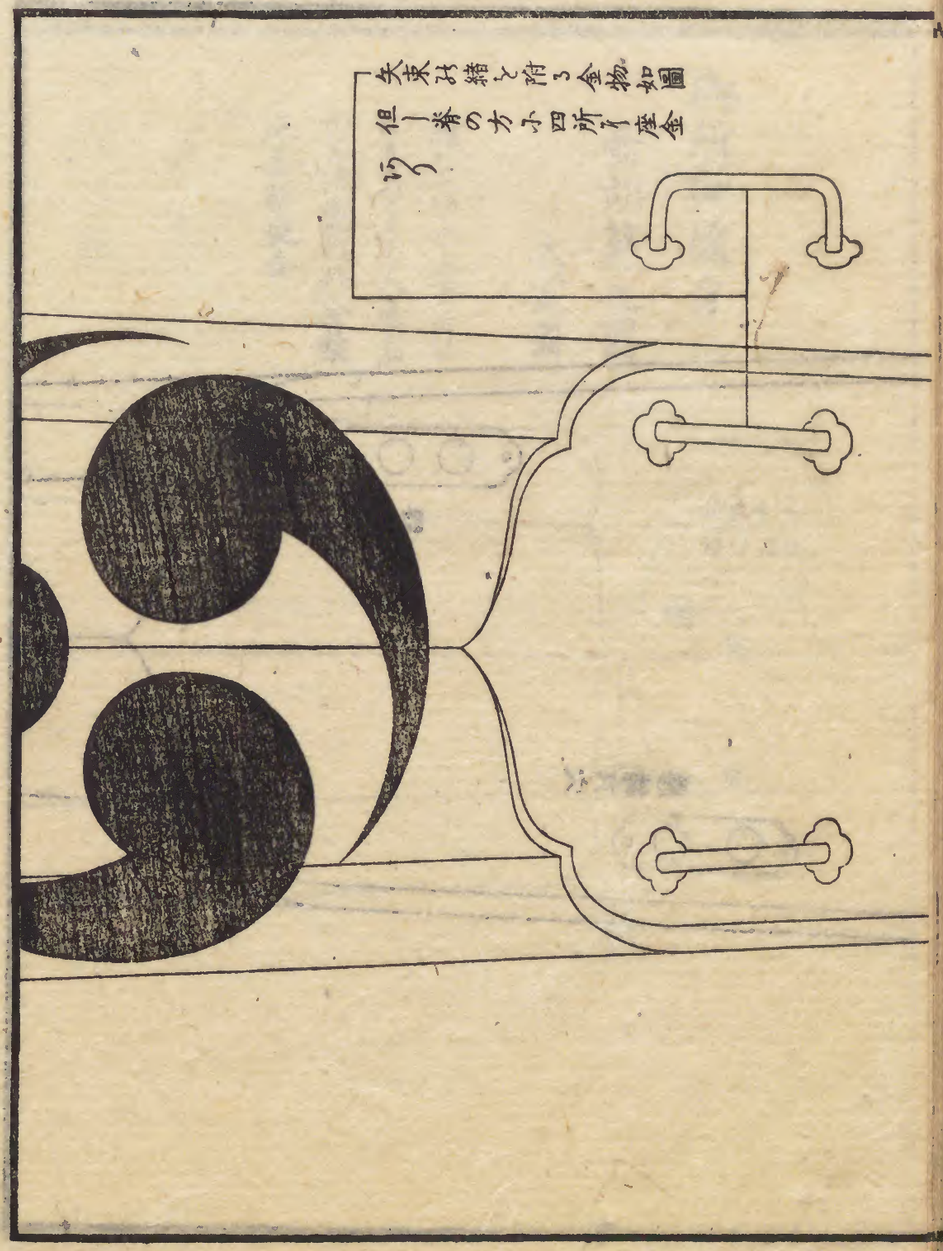
大サ如圖

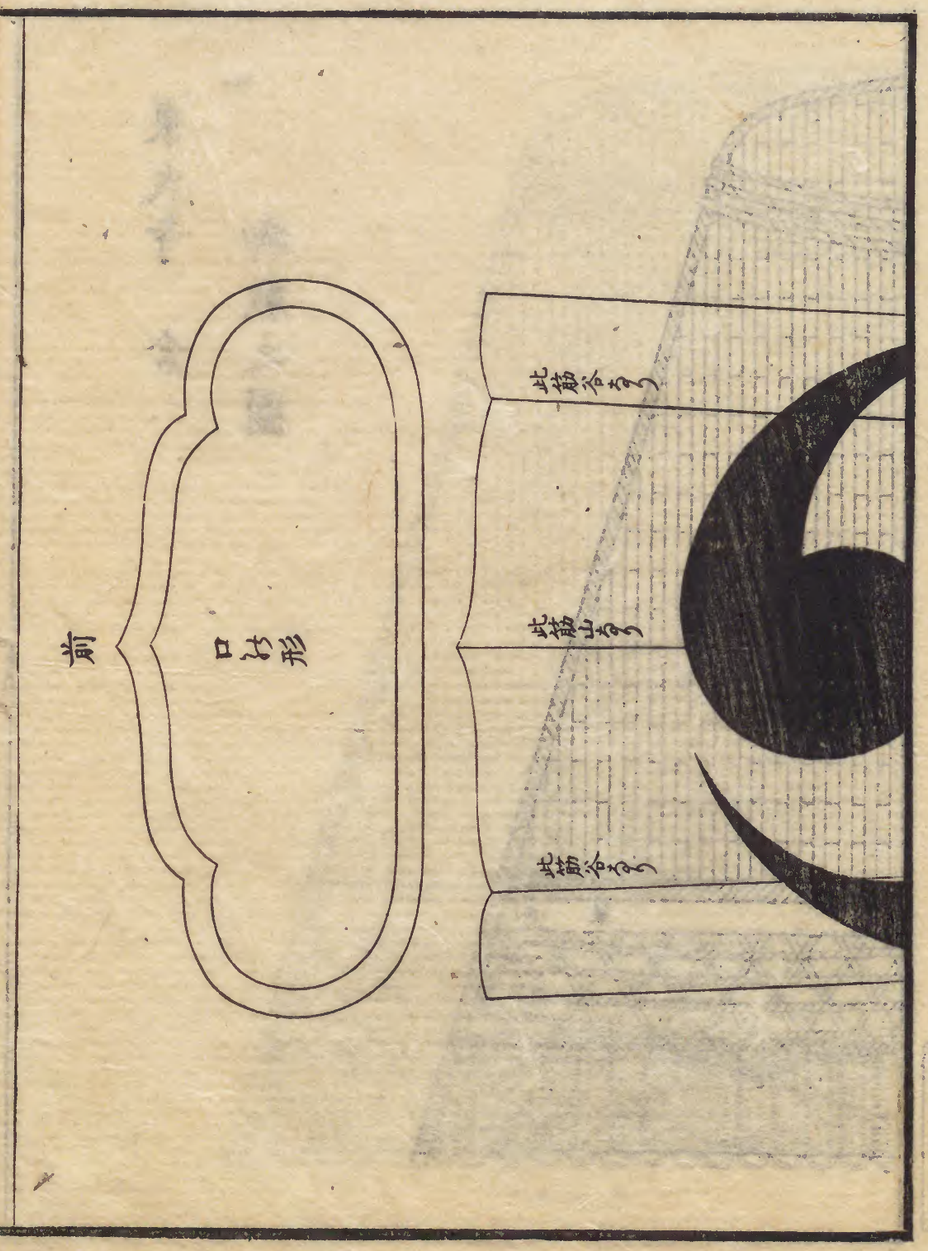
檜を以て造り内を
くりぬきて入底ふ
たふ總内外金黎
地金物滅金

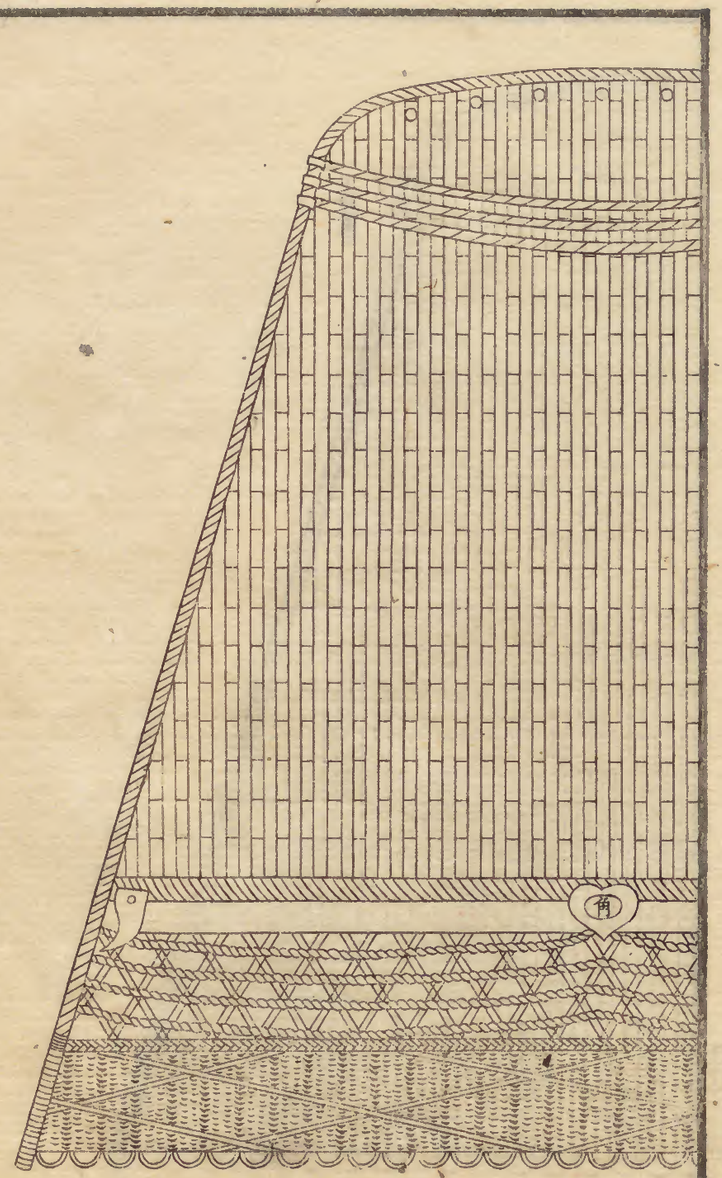


日本古義四ノ二十四

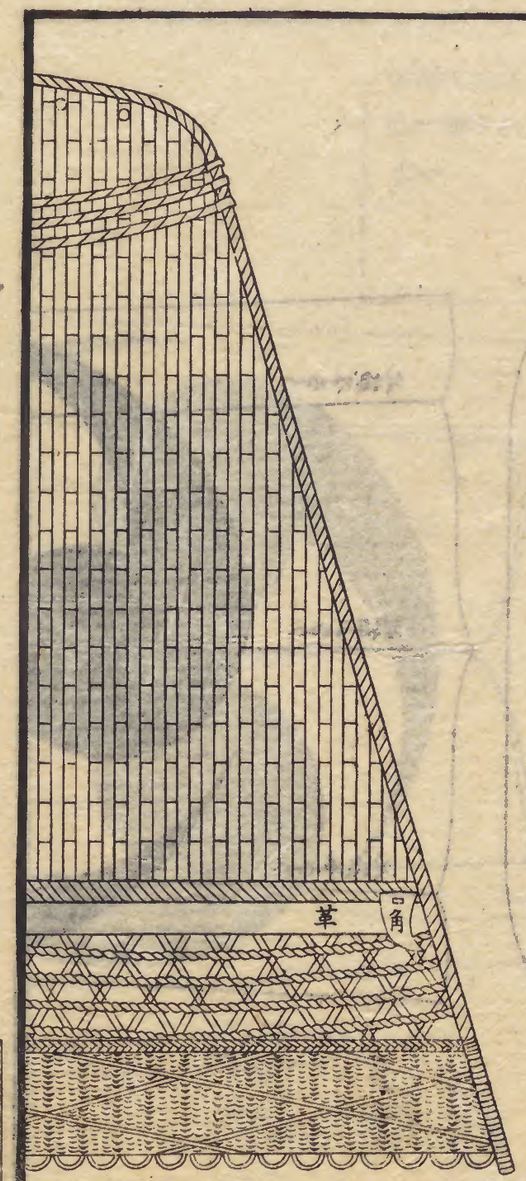


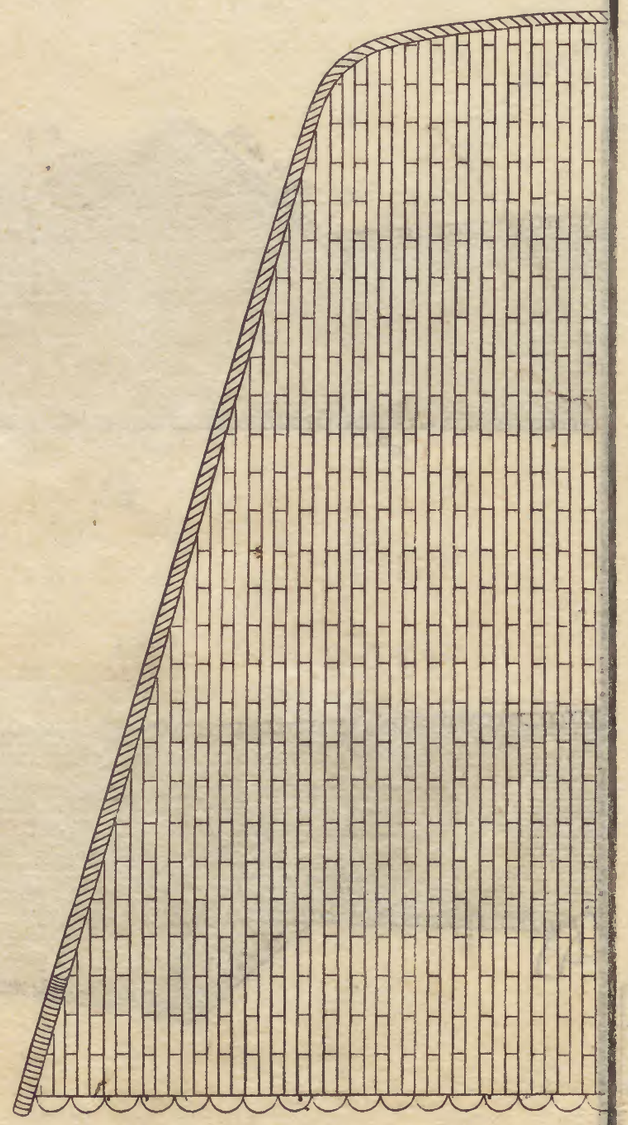

矢束ハ結と附る金物如圖
但一巻の方ハ四所ノ座金
ハ


此筋ハ冷まる
此筋ハ冷まる
此筋ハ冷まる
前
口ハ形

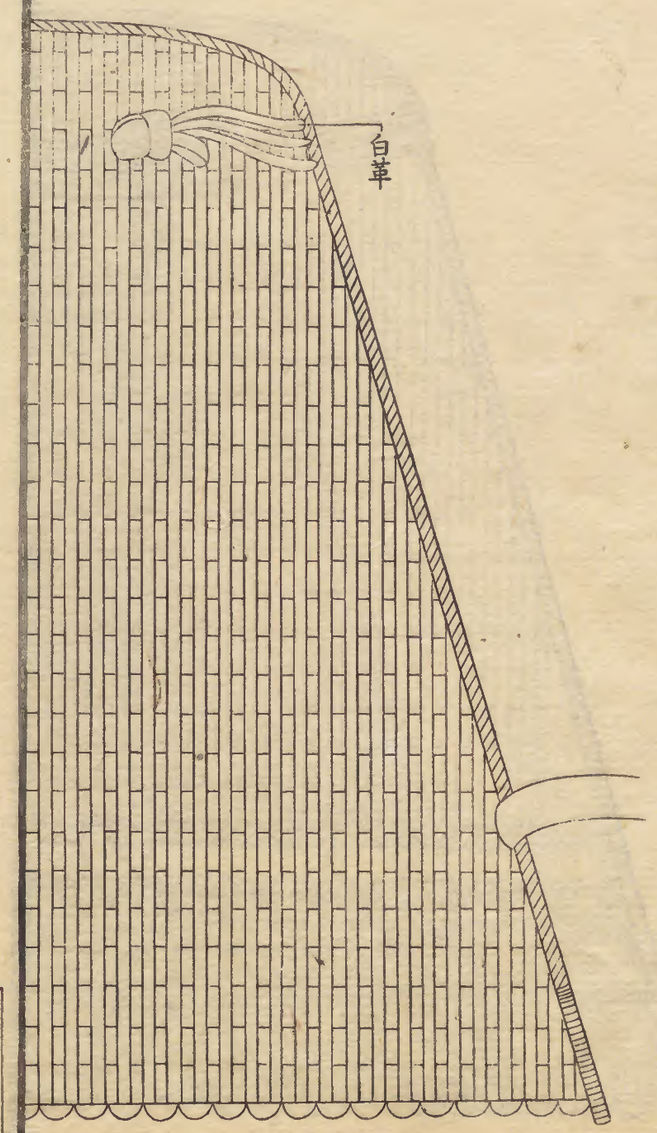


東大寺倉
御敷之圖





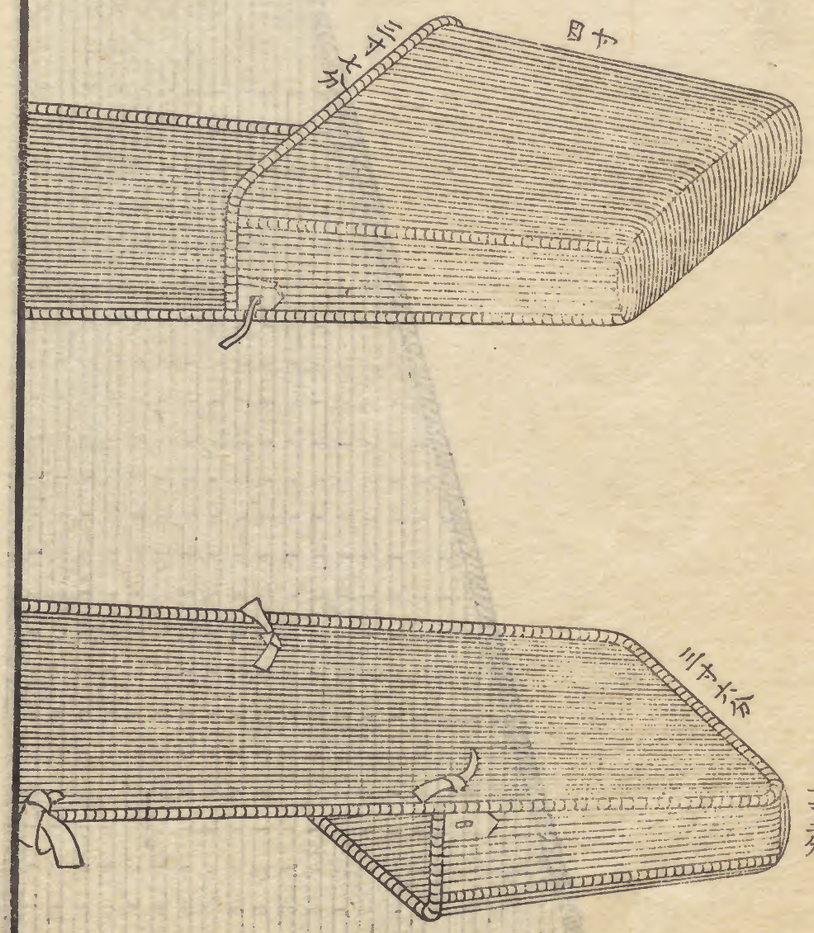
同裏

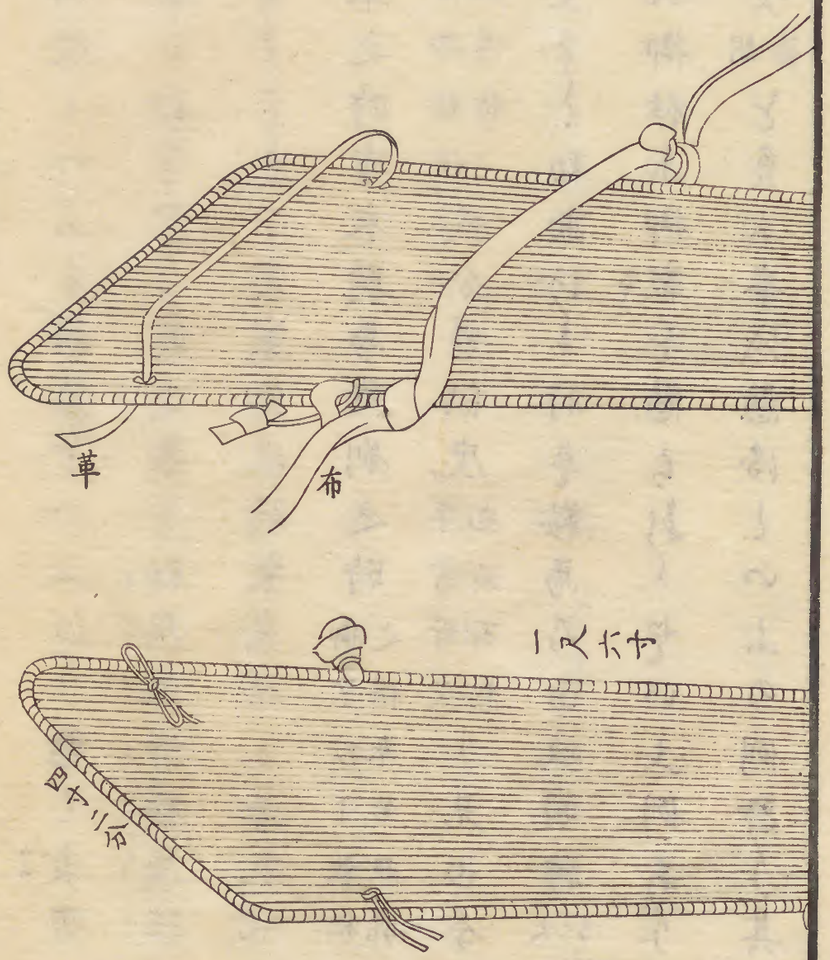


国立公文書館
National Archives of Japan

同

御胡籙之圖





調度懸

調度といふを胡籙をいふなり懸とは表帯を肩に懸るなり号なり萬葉集に靫懸流伴雄廣伎大伴余ものらえに定家卿次將裝束抄に著衣冠布衣供奉之時布衣騎馬殊刷之時（御幸以下執柄宇治入之供奉若親昵之人如公卿勅使相伴時）或令懸調度尋常野矢也必不然と見也今は世に至て勅勘ある時を鞍馬の由岐明神（大已貴神を祀る）社御社に御靫を懸らるゝといふ例あり此等調度（胡籙）を負ふ事は懸ふといふの例なり其胡籙を

負ひ弓を持る隨身は役名なれども唱ふるなり御禊行幸服飾部類康治元年十月廿六日宇槐記に云馬副十人（瀧口一二騰一右二左）中畧瀧口調度懸十人（淺黄狩衣袴也俗呼曰槿色黄色）調度懸不狹尻刻礼胡籙如常負但以表帯自左肩弦巻當胸結之弓右持以弦方爲表又壽永元信範記云御馬副十二人（各具調度懸）調度懸十二人淺黄狩衣袴黄袙一重合袴烏帽子（平礼帯）藁沓と見えたり

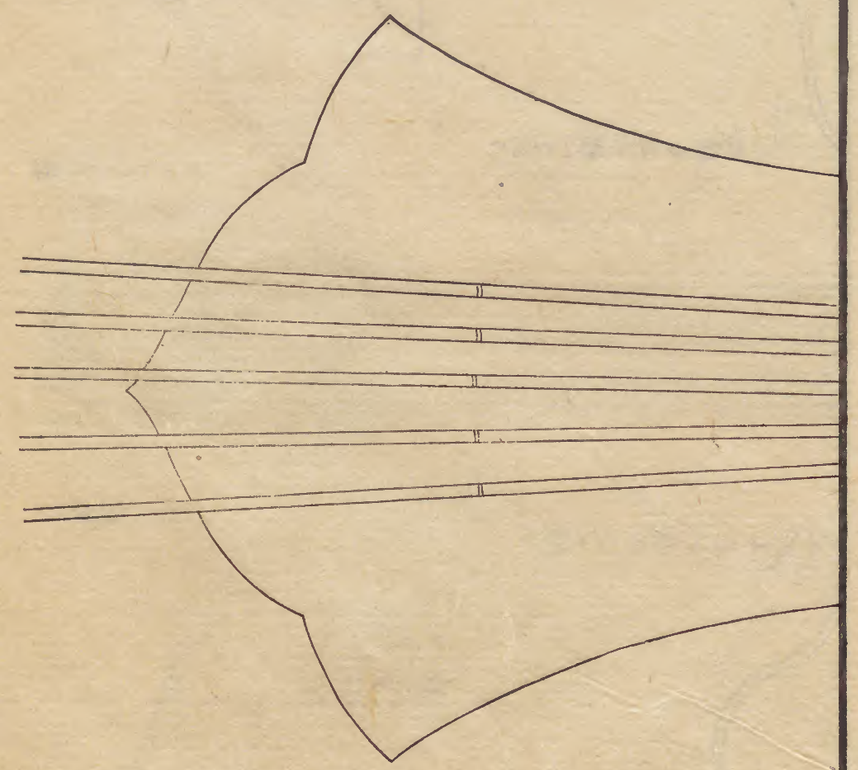
繪ゝ
武賀茂祭
大永

圖ゝ
語ゝ
物
雄
治
長
紀
調度懸ゝ

武家ゝ調度懸といふ事を鎌倉殿ゝ代ゝ始
て将軍家の御箙を御調度と稱ゝ箙ハ将
軍家ゝ負ゝ給ふ重器ゝ也ゝ第一ゝ御
調度ゝ也ゝ御箙ゝ御調度ゝ稱ゝ
り将軍みぢゝ負ゝ給ハゝ弓馬ゝ

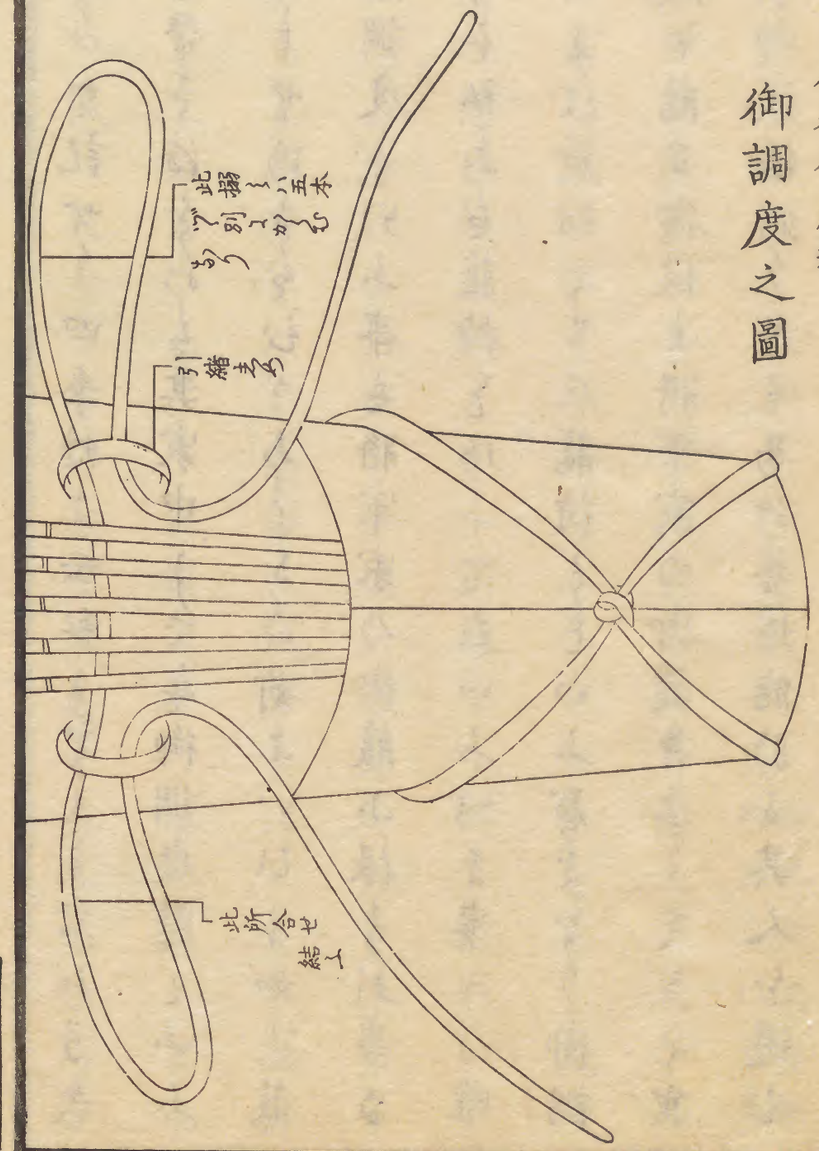
達しをは神武の士御調度を懸る形り是を御調度懸の御役といふをり布衣記よ齋藤越前守助成記永仁三年八月一調度懸の事上下同色くゝを上げ刀をはひもと戎ゆひ弓を持ひもをかをを左乃肩へ懸け右の脇を下へ引はゝ弦をれ戎かゝにをゝを次ゑ白布を十徳の帶絹の如く平ゞをを所をる其帶を以てをゝ戎腰をはゝ弓をばはるを上ゑをゝ程を右乃かゝにゝを本をゝ戎一尺をゝをを右を手をゝかゝゝゝ

形りを記せり四季艸ゝ云私ゑをも主君の弓矢を帶をはをを其家中ををを御調度懸といふべゝをゝをゝをゝ前ゑいひゝ如く箙を調度といふ事を將軍家乃御箙ゑ限をれ事ゑをを私ゑを箙持をゝを左いふべゝ事ゝハ唯私ゑは箙持をも尻籠持をもいふべをゝ御調度を懸る御役を將軍家の御隨身ゑゝを至ゝ重を御役儀ゝ尤弓馬の藝堪能形る其人を選ををゝゝ事東鑑ゑ記をり

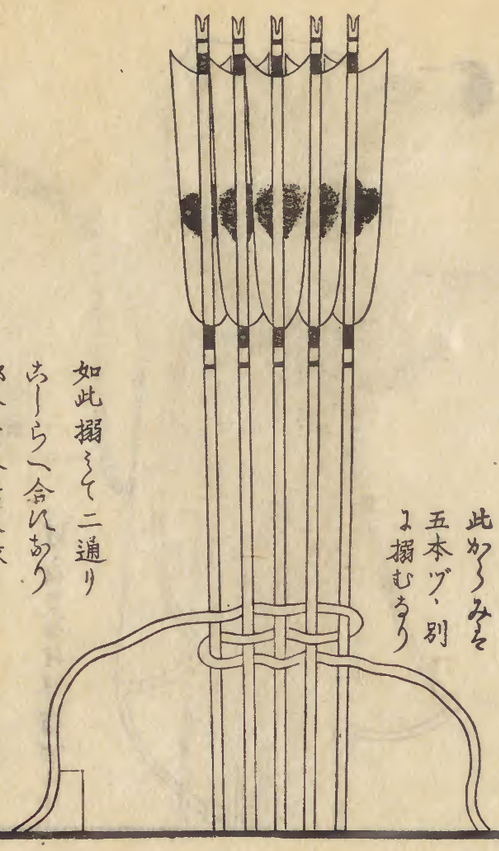


東使恭居所藏

御調度之圖

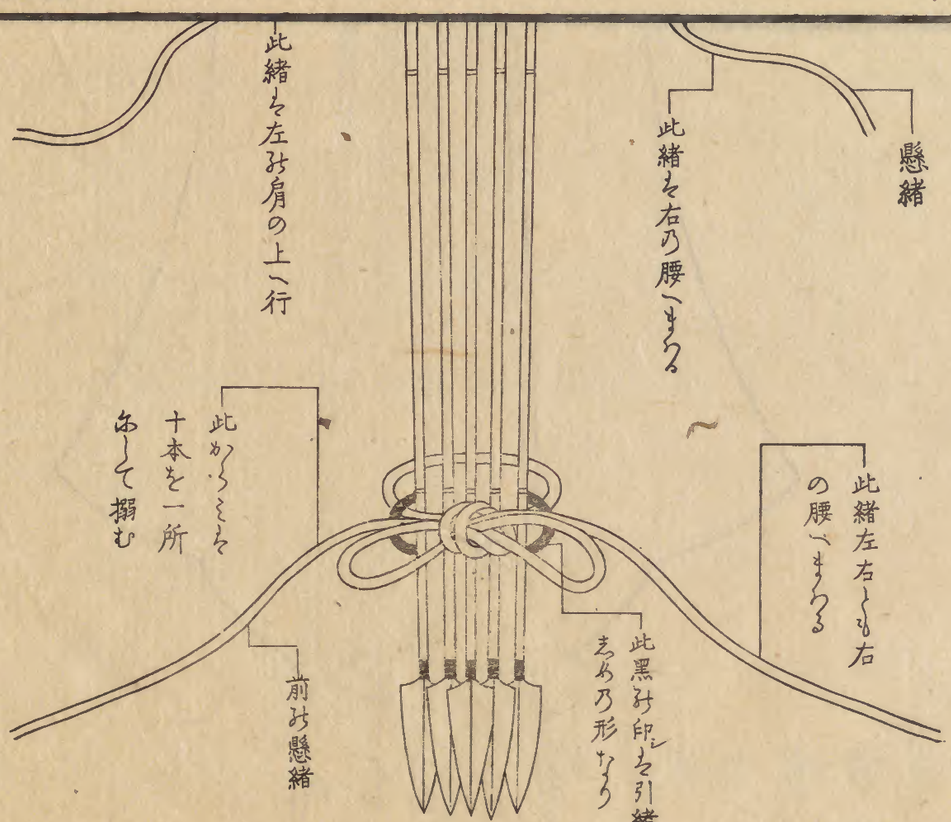


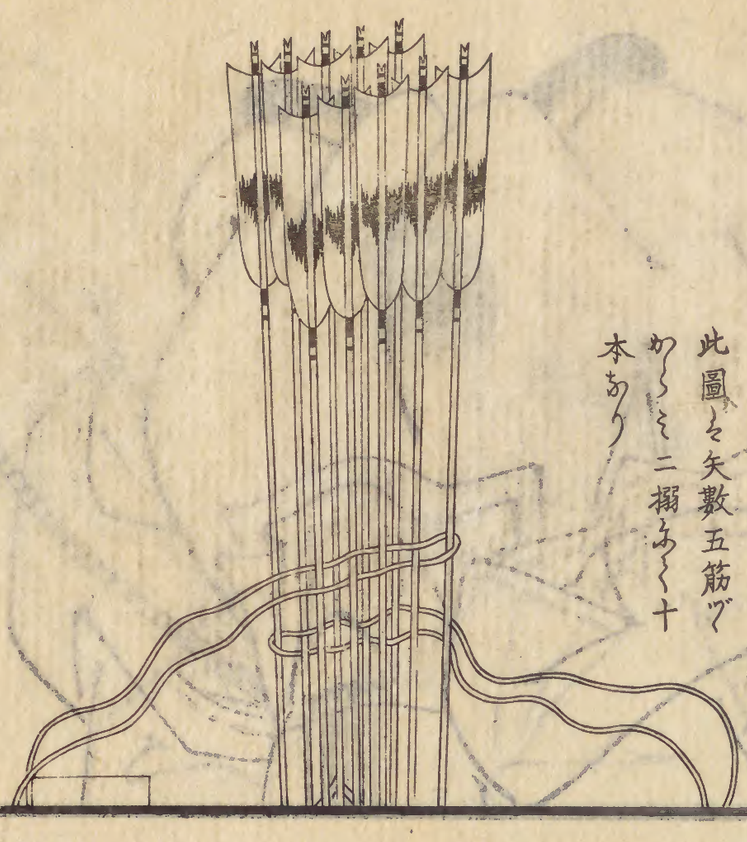
矢々征矢あり根々細根なり懸緒々
白黑薄黃み三色乃ゑくぼく打あり
前の懸緒々同前なり



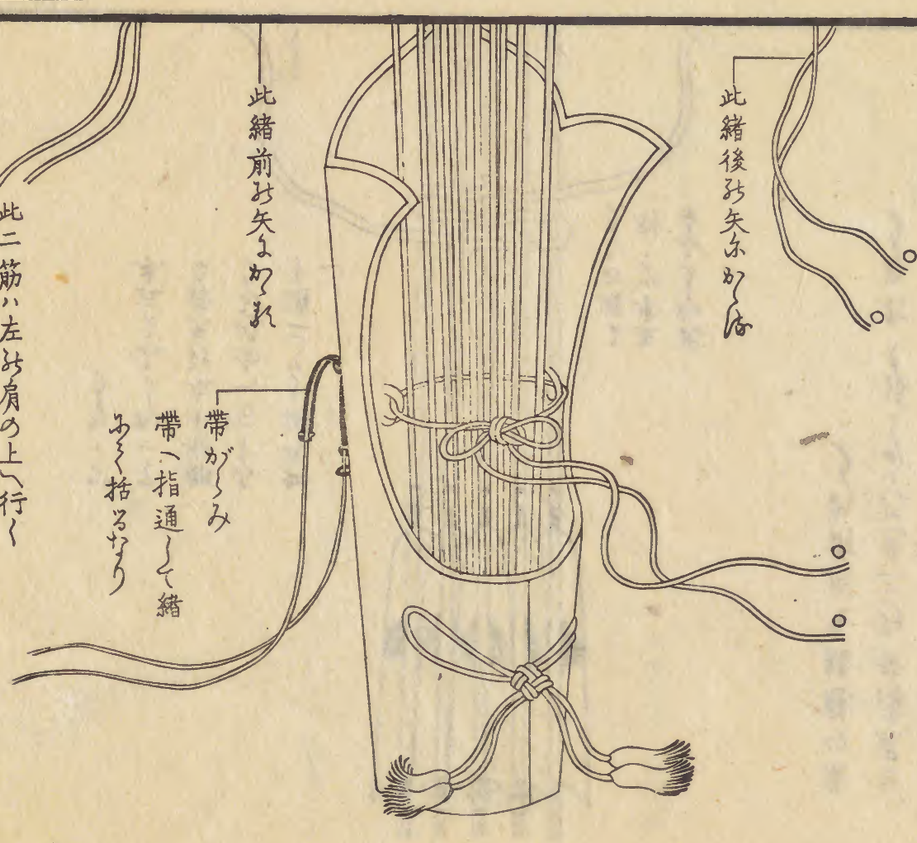
此めくみ々
五本づゝ別
々搦むなり

如此搦々て二通り
あしらへ合にあり
都合十本ゝ矢數る
々一めくみ五本
づゝなり



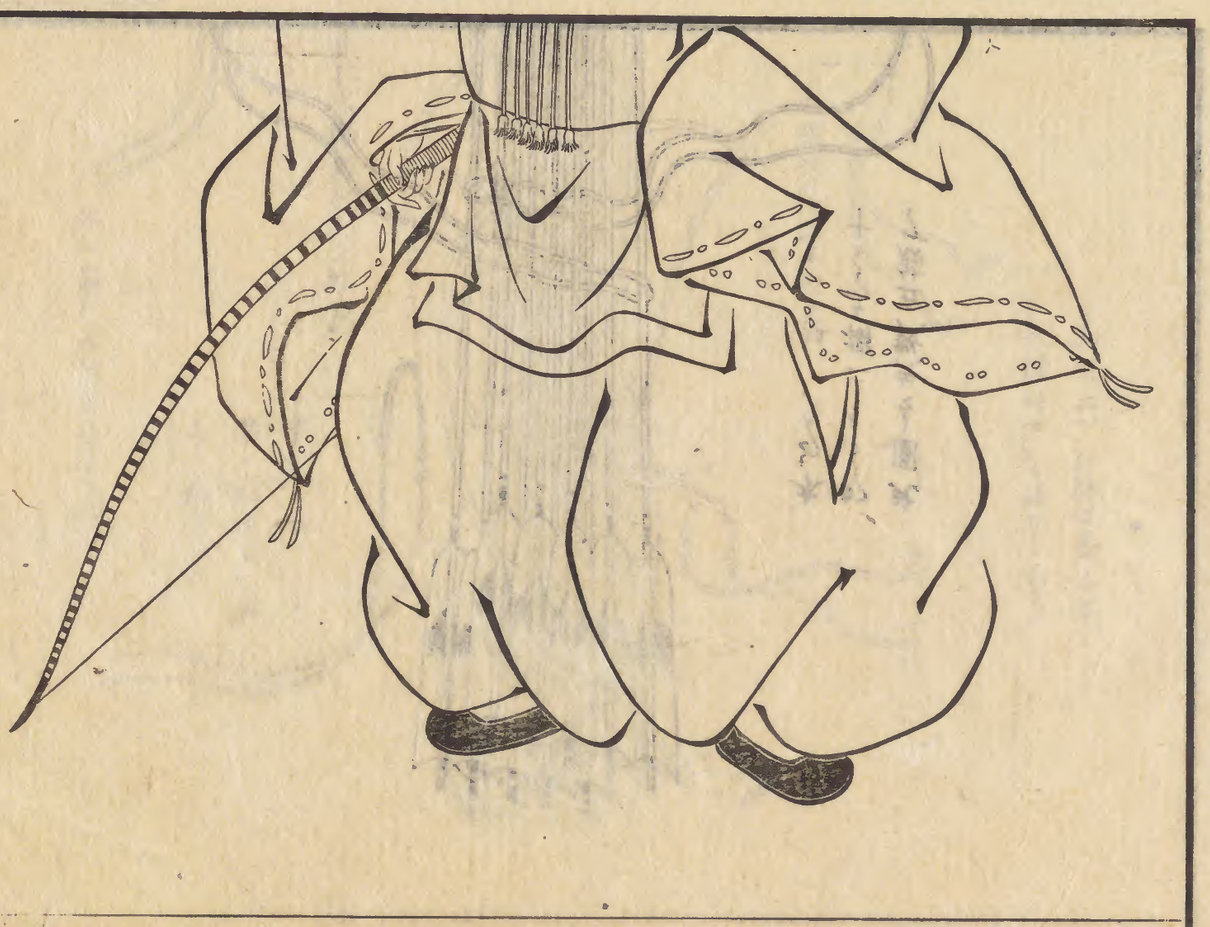


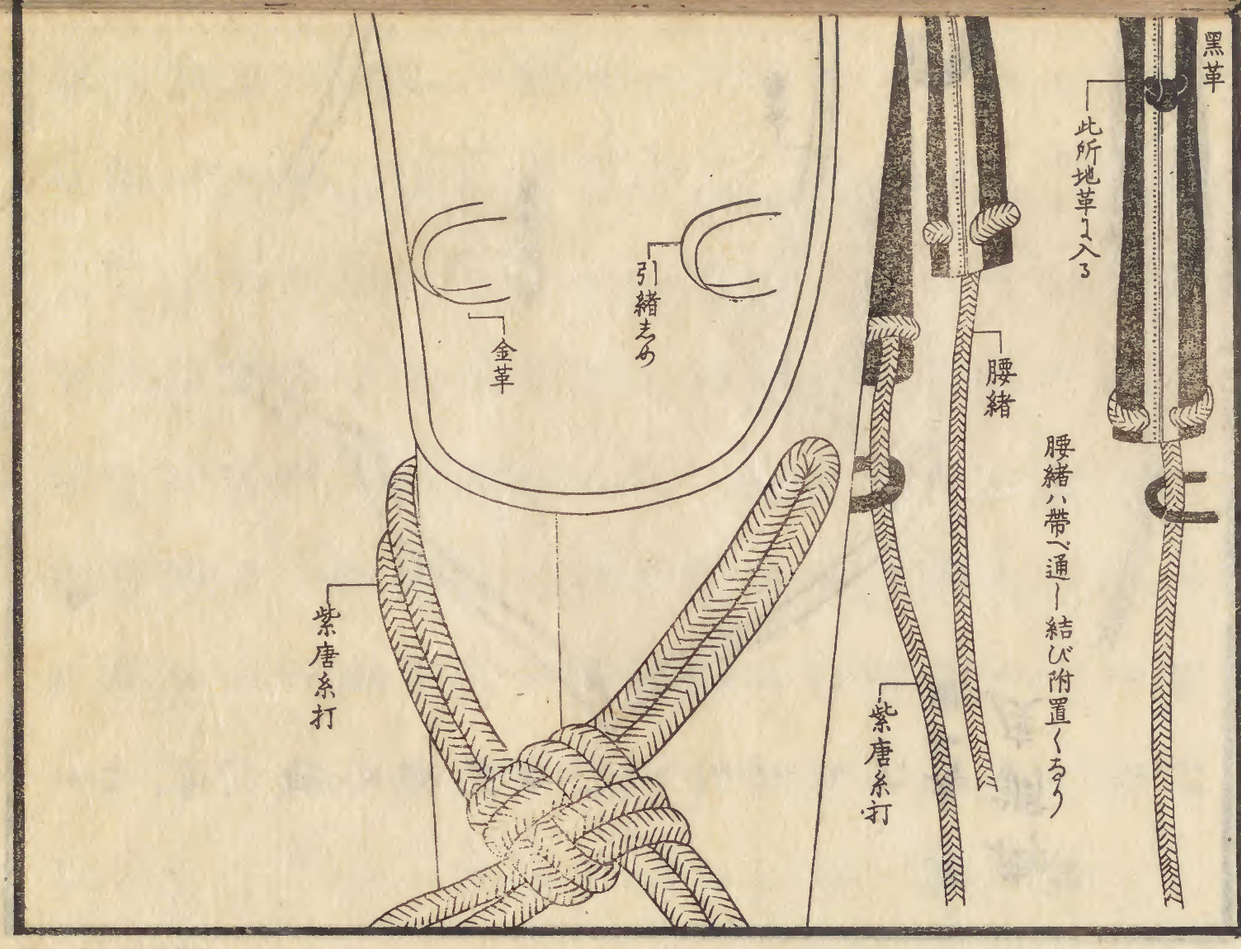
此圖々矢數五筋づゝ二搦ゝ十本あり

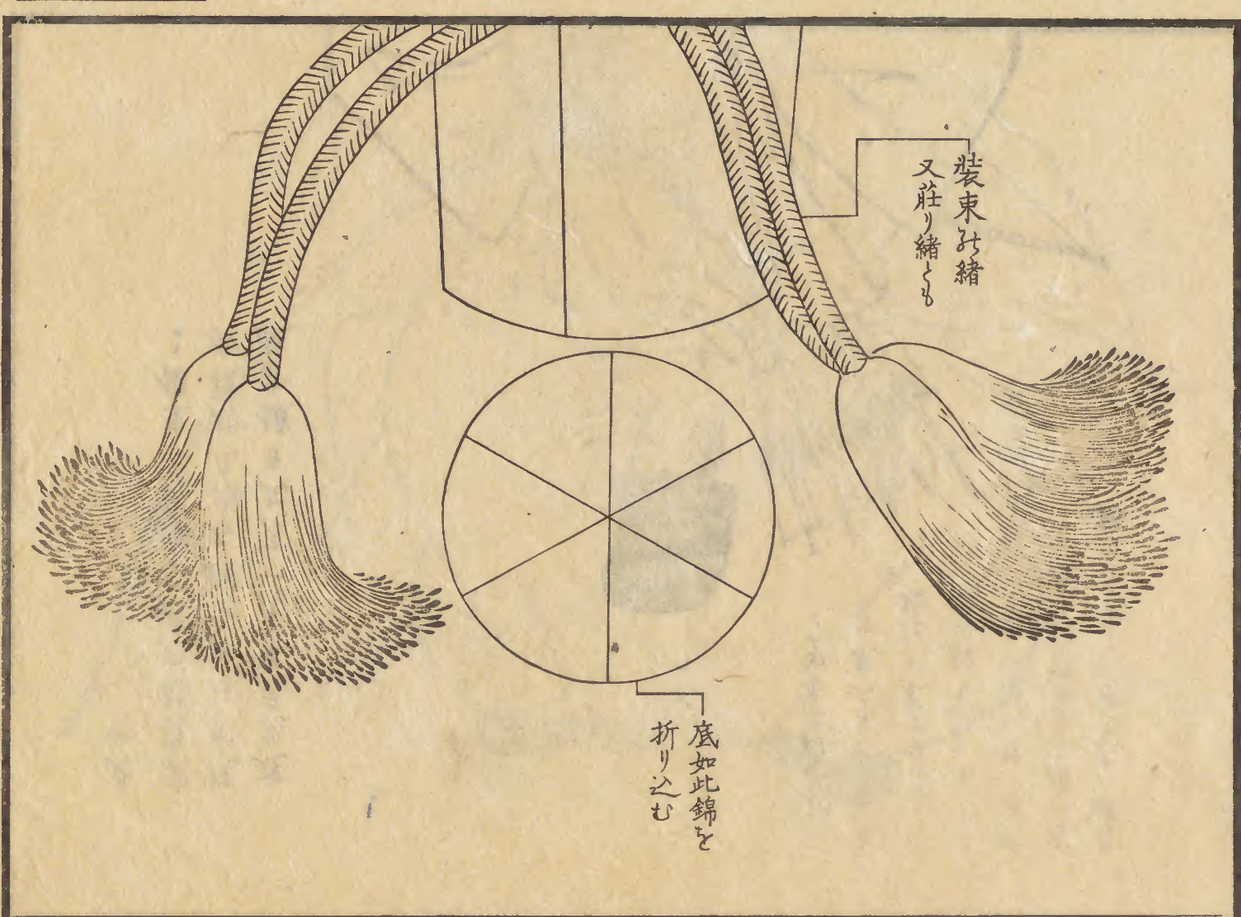


懸緒ハ左の肩より上へ二筋
右の腰へ四筋かゝる
懸緒ハ胸より通りて
ワツ束ゝ取て結ぶべ
〳〵但〳〵ワツ束とは輪
束ゐ〳〵て手一束づ
ゝに分て結ぶ事あり

建久元年十一月九日鎌倉殿
院參ゟ日中村右馬允時經御
調度懸の役ゟ候べと東鑑ゝ
見ゆ




黒革
此所地革ニ入る
腰緒
腰緒ハ帯ヘ通シ結び附置くるゝ
紫唐糸打
引緒ちゞめ
金革
紫唐糸打


裝束ヒも緒
又莊り緒とも
底如此錦を
折り込む

無戸穂（ウツホ）

羽壺を狩場に具し給ふ事は頼義朝臣の頃にはじまり始め給しものなり古代狩場には山箙（ヤナブ）として眞藤（フヂ）などを造りて箙を負ひ給ひ然るに箙をくゝ森林などに分入り給ふ矢ばかりにて便りなきを其利用を考へ工作して出だせるものなり此時代を狩場に用ひしものを無戸（ウツホ）といふものなり無戸とは根ぐりの指にしたがふして空（ウ）く矢を明（ア）けられしものをいふ詞なり藁にて穂手を造り矢を一本竿にして搦（ク）みたるを空鳴（ウナ）ぬく物

矢かゝみの如く一本掛そへに尻籠負へる
ざゝを負ひしをもて形の羽壺を本此無戸よ猪
の毛皮多く袋を造りてかゝるものなり其毛皮
うけゝる形中空ふまて稲穂の如くあ見ゆる故
よ空穂(ウツホ)といひ習ゝたれなり毛先の所を穂先
もどいへて無戸(ウツ)負ひ半れ時を腰ぐりにあるも
の故よ切腰等乃名ありて竈(カマド)といへるも内空虚よ
まゝ戸形なきもの名なり又此物中無戸(ウツロ)室なる
もの故ゐ直に其名をよびて無戸空(ウツホ)口(ロ)と相通ゝを

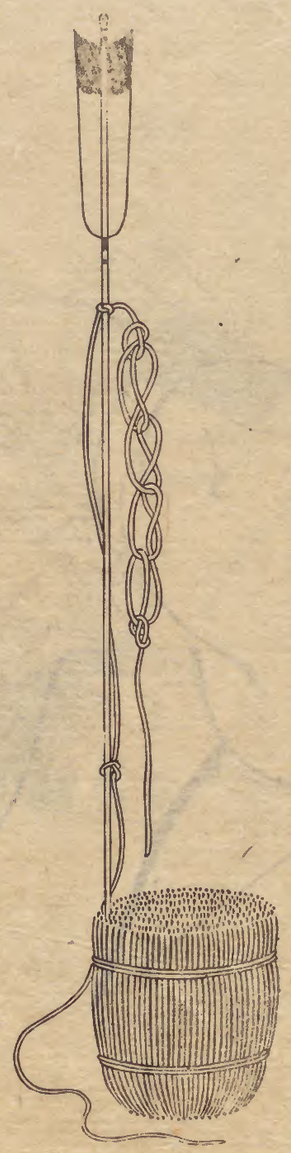
いひしなり又狩場の具なる故よ羽壺の矢を抜
れ出を狩(カリダ)出れ形をいふ古な詞遺なり又壺胡
籙といふも同ど名ふして其形壺小似あれで東
鑑よは羽壺と書て此羽壺を猪の皮或熊の毛皮
ふゝ包むを箙ふなるゝひあるものなり又塗て
るをで山羽壺といへて山狩ふ用ゆるをの形
が故よかくをいふ那書大和羽壺といふを山羽
壺の誤なり毛皮ふ多くあるをば騎馬羽壺といひ
塗てあれをバ歩羽壺やいひ習ゝなり此羽壺附

ゐあをちして習ひ色形しぬ〳〵はくをみ故と懸
緒を切て腰みの邊ゝて一ッをぢりて附きばをく
かゝはゆ〳〵なり弦袋を箙みに腰緒ゐ附くる如く
糸附くゐ形を行路ゐを替弦と眞蓋(マフタ)みに内裏ゐ入
きをゝ〳〵

無戸(ウッ)之圖

今乃世糸田舎して婚姻みをに無戸(ウッ)と名をて藁と
縄を巻たゐるをみを持て祝をゐあとゐり此無戸
ふ似半れをのゆゑゐ如く名くゐゐり但しウッを
打なり物を打つ具みに名なり鞭(ムチ)をムチともブチと
も轉ひ〳〵と同じ

日本古義四ノ三十九



山門僧傳繪巻ふ見ゆ　土佐光信画
羽壺ゝ表矢指〳〵ゐる圖

元祖土佐基光相撲繪ふ見ゆ
相撲節會御隨身見物人を制する圖體なり
壺胡籙ゝ表矢指ーある圖

国立公文書館
National Archives of Japan

矢籠

尻籠ハ鎌倉殿ノ代ノ製ナリ將軍家ノ御箙ヲバ御調度ト稱シ重セラレ箙ヲ大將ノ器ヲ士ヲ憚リテ箙ヲ略シテ尻籠ヲ製シテ用ヒアリ尻ヲ矢尻ナリ籠ヲ根受ナリ其代ニ是ヲ箙尻籠（エビラノコ）ト云ヘリ前ニ引書ヲ齋藤助成記調度懸ノ條ニ前ニ志ヲ切ヒ ト云ヘリ後ニ志ビラ附ヤ云ヒシ尻籠ト箙ヲ別カルヽ ヒシ箙ヲ尻籠トモ矢籠ヲ箙ヲ云ヒシ事ハ又胡籙矢籠ヲ云ヒシ ヒシ ナリ今ノ世ニ行路ニ持ヲ ハ大概皆尻籠ヲ稀ニ箙ヲ持ヲ ヲ箙矢籠ト云ヘリ此

例ナリ東使恭居（ヤスタカ）藏ヲ新ニ箙尻籠ト云ヲ見ル古ヲノ ニシテ其形流鏑箙ニ似ル上古

朝廷ニ五月五日ニ騎射叡覽アリシ ヲ爲盛ノ ミシ歌ヨ箙ニ ヒ

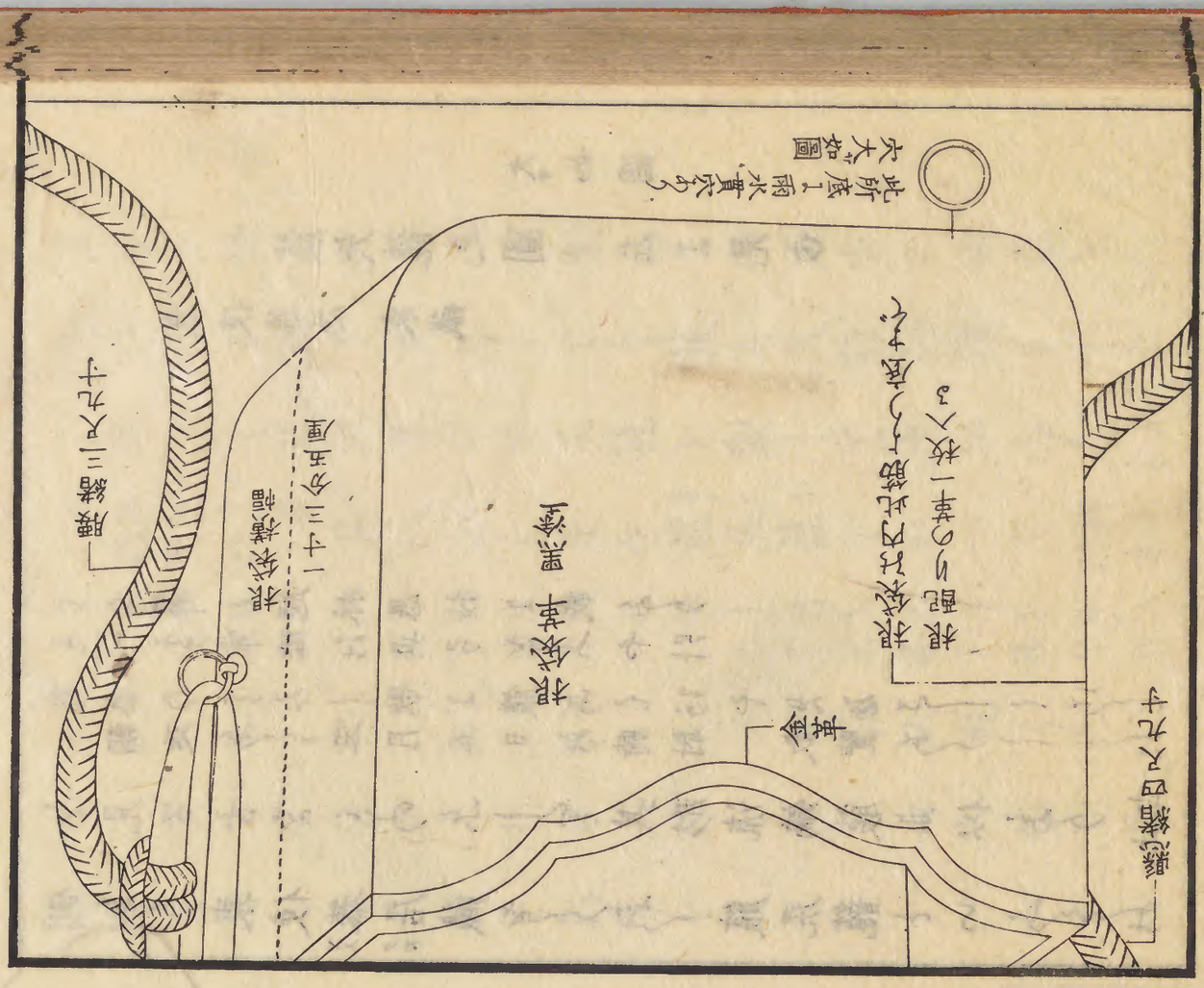
ヲヘヲ常陸ニ眞弓ヤ引 ヤ

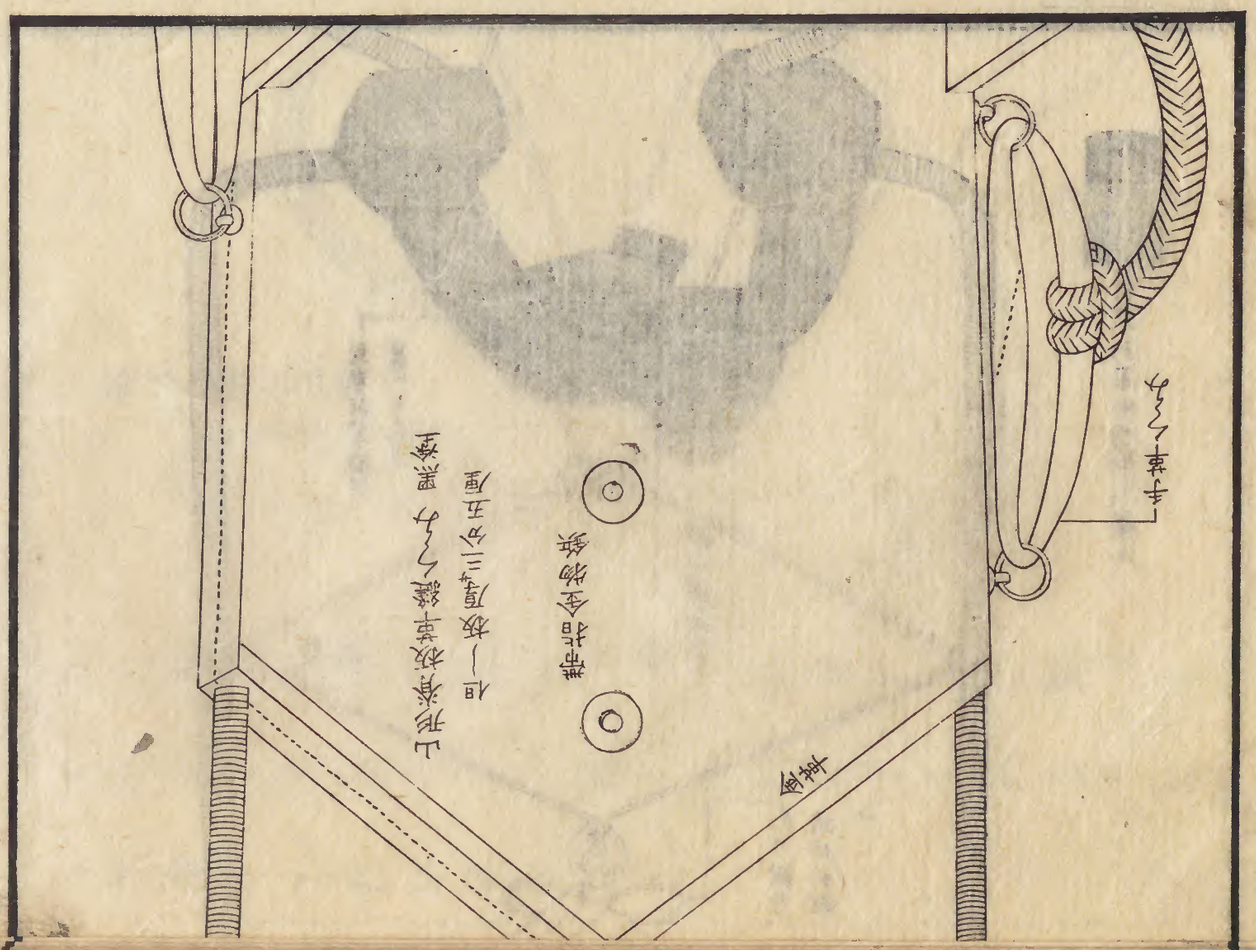
くら筆ト題林愚抄ヨ載ル

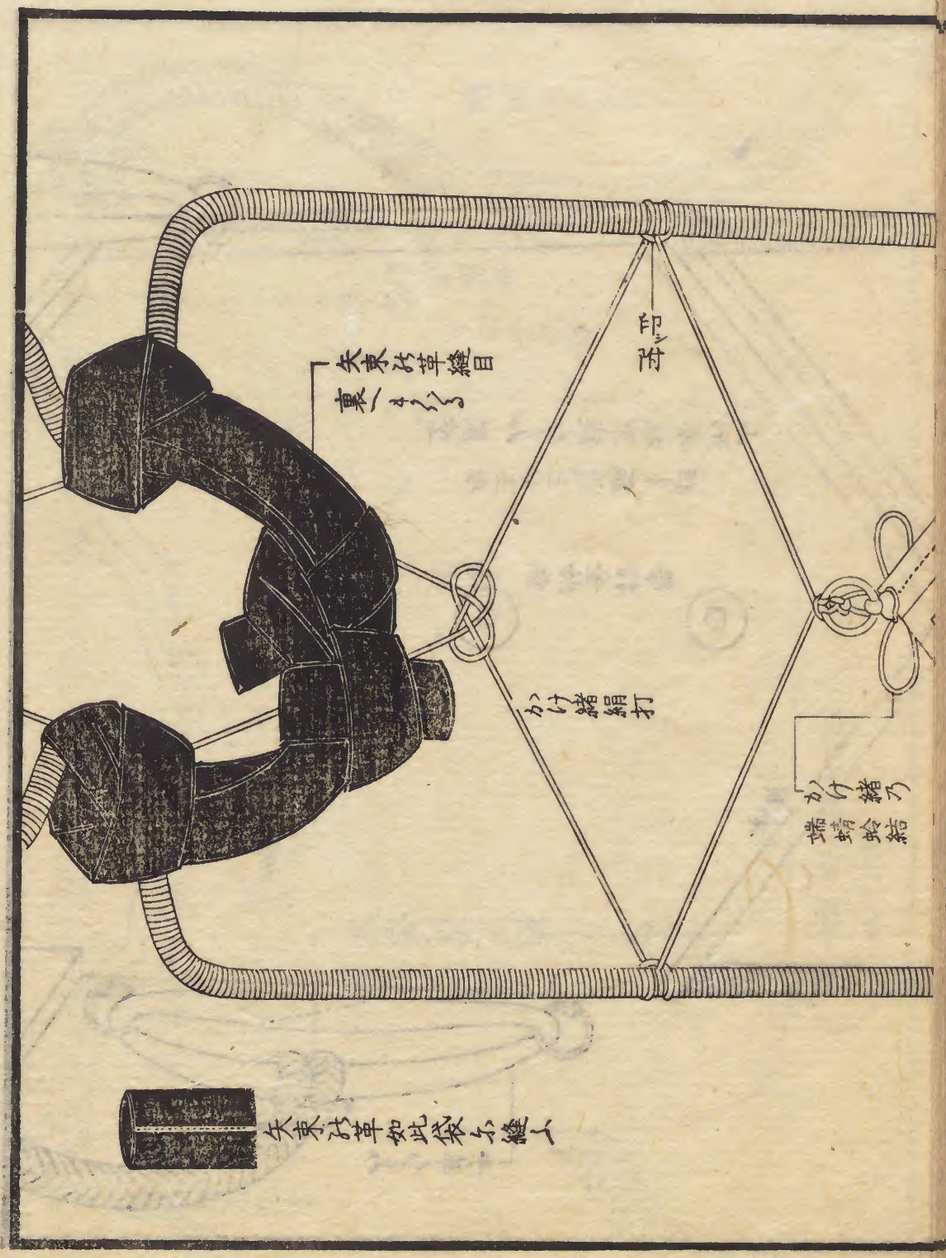
東使恭居 家藏

箙矢籠之圖 左ヨ見ヨ

大サ如圖

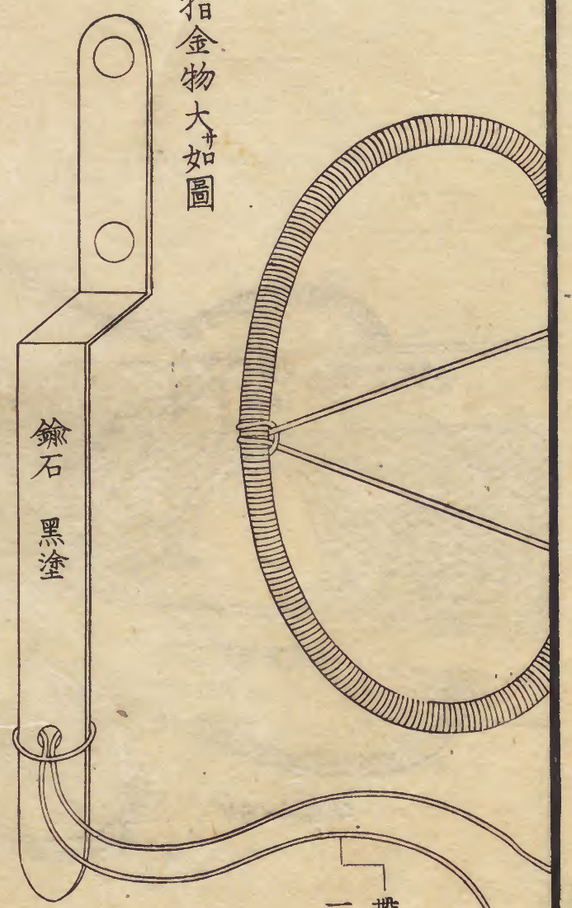

鐙緒四尺九寸
車軸
根太板社内北敷ヶ底ヶ所
根配りの車一枚入る
根太板車 黒漆
根太板幅
一十三分五厘
鐙緒三尺九寸
此所屋根一間次第分ける


車軸ノ穴
帯地金物鋲
上形背板車縁ノ穴 黒漆
但一板厚七分五厘
地板

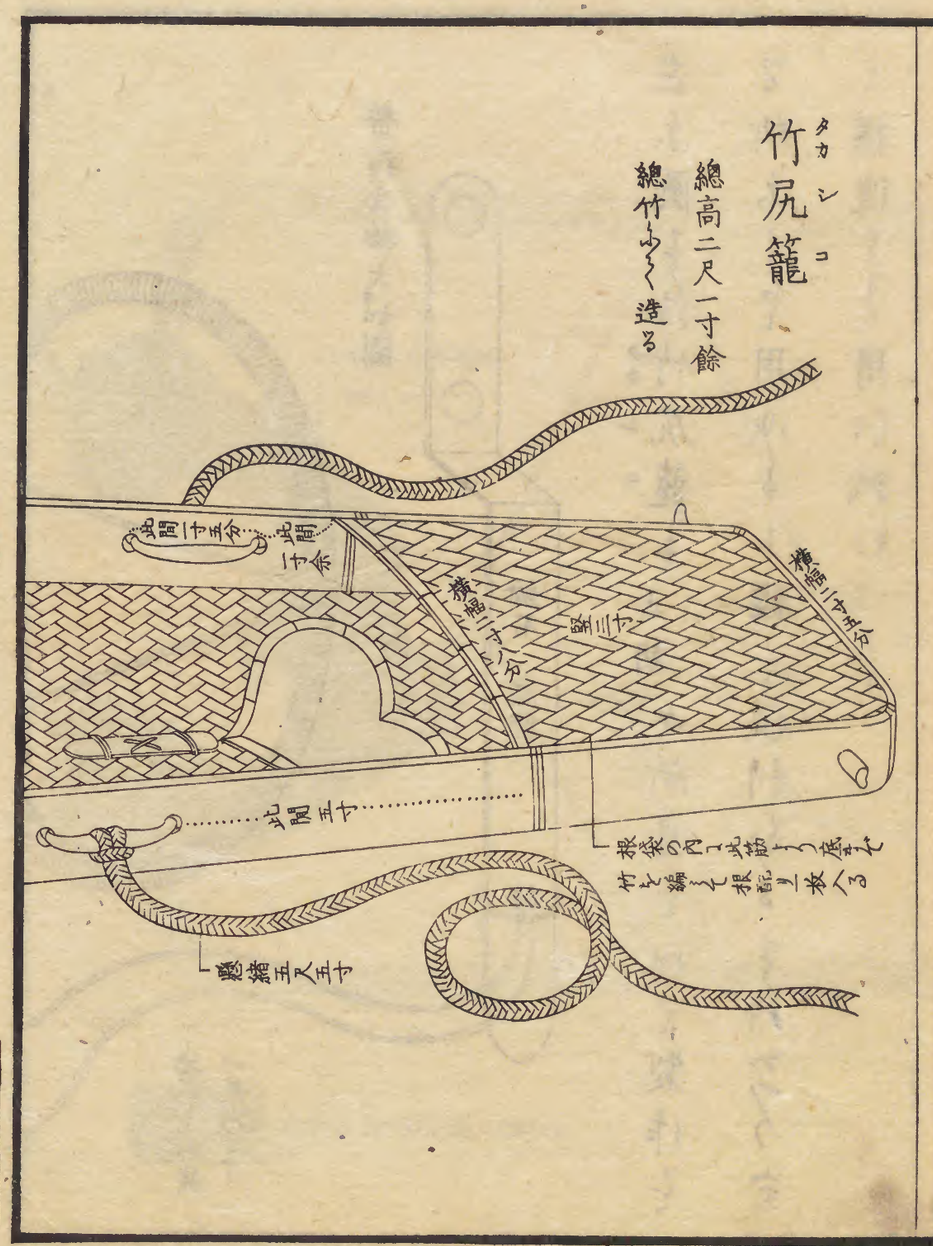


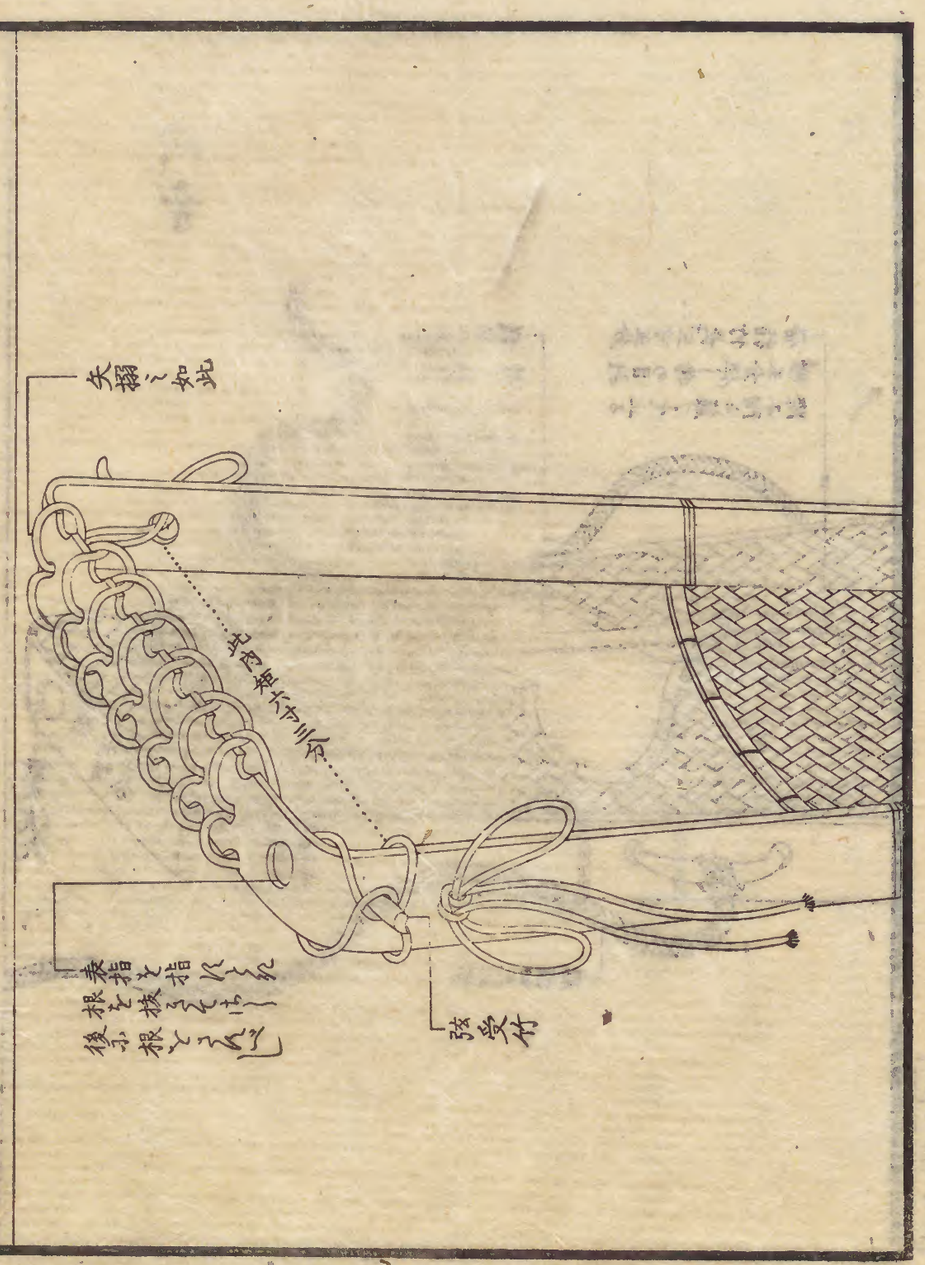
日本古義四ノ四十三

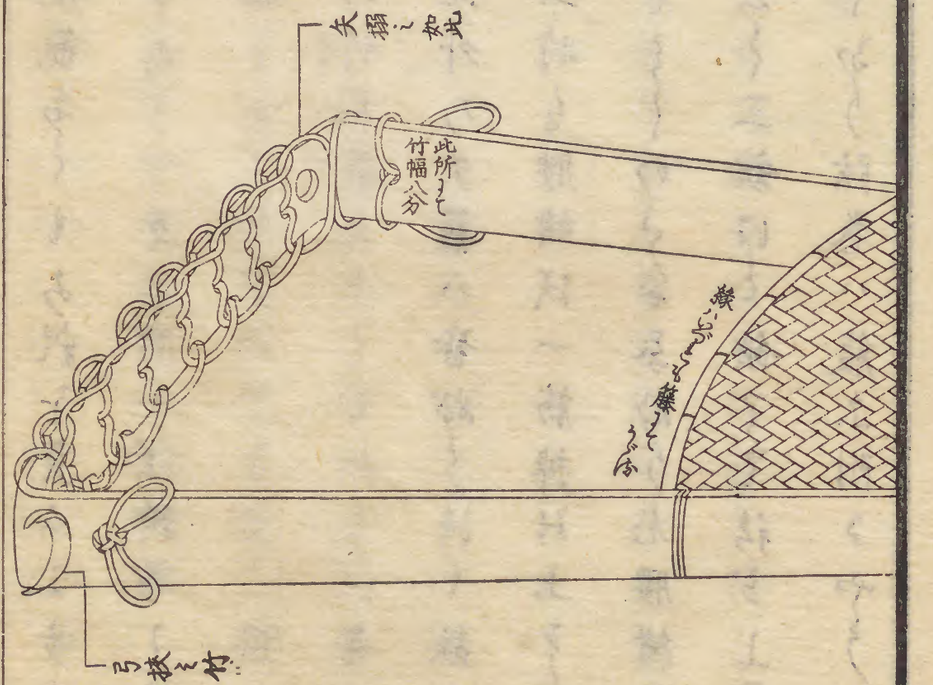
帶指金物大サ如圖

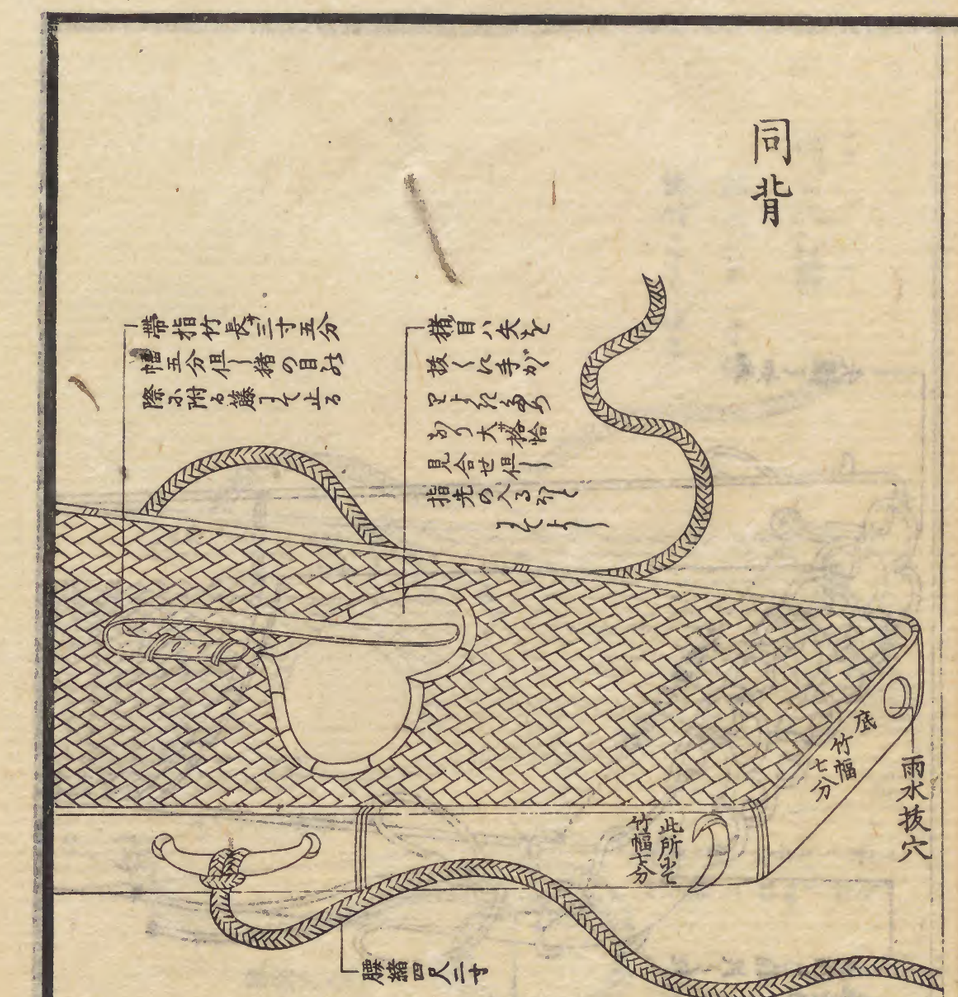


左ハ圖ニ付竹尻籠（タカシコ）を正朝が新意を以て製作をる所ハ〻て用ゆるよ輕く便利なるをみなり宜く摸造〻〻用ひ試むべし


竹尻籠
總高二尺一寸餘
總竹ゆゝ造る
横幅二寸八分
横幅二寸八分
横幅二寸八分
堅三寸
横袋の内ゝ光沢ゝう塗れ
竹と編ゝて根配り一枚入る
此間五寸
此間五寸
此間二寸五分
二寸余
懸緒五尺五寸


矢摺ゝ処
此間長七寸三分
表指と指とゝ孔
後ふ根と根とゝ孔
弦受竹


矢掛ゝ如此
此所にて竹幅八分
竹ゝ抜ゝ


同背
帯指竹長三寸五分
幅五分但一猪の目ゝ
際ゝ附る鎌ゝて止る
指先の入る所ゝ
見合せ但一猪の目ゝ
切り大ぎ格恰
足ゝ抜ゝ孔ゝ有
雨水抜穴
底竹幅七分
此所にて竹幅七分
ヤリ口鎌鎌

尻籠負ひやうの本義

いばをみ尻籠あるいは紙を負ふと歩立みてを首尾狂ひ多きつゝを身に附うて騎馬しては股又は鞍の前輪を多くれて多ひ多きつゝ前に圖きれ箙尻籠右の竹尻籠を少しも狂うて身に附うと附くあり此外の矢籠は皆ぬゝ法く故に加法尻籠を負ふ時を腰緒に一筋棹の上を印附ふ結ひ〻負へで〻〻かゝ面に形り左腰緒を前みて壺穴結ふきゝ三鎖ゆと鎖して後ゞ上帯に下を挟ゝ置くあり弦巻は箙に附るやうにきべし

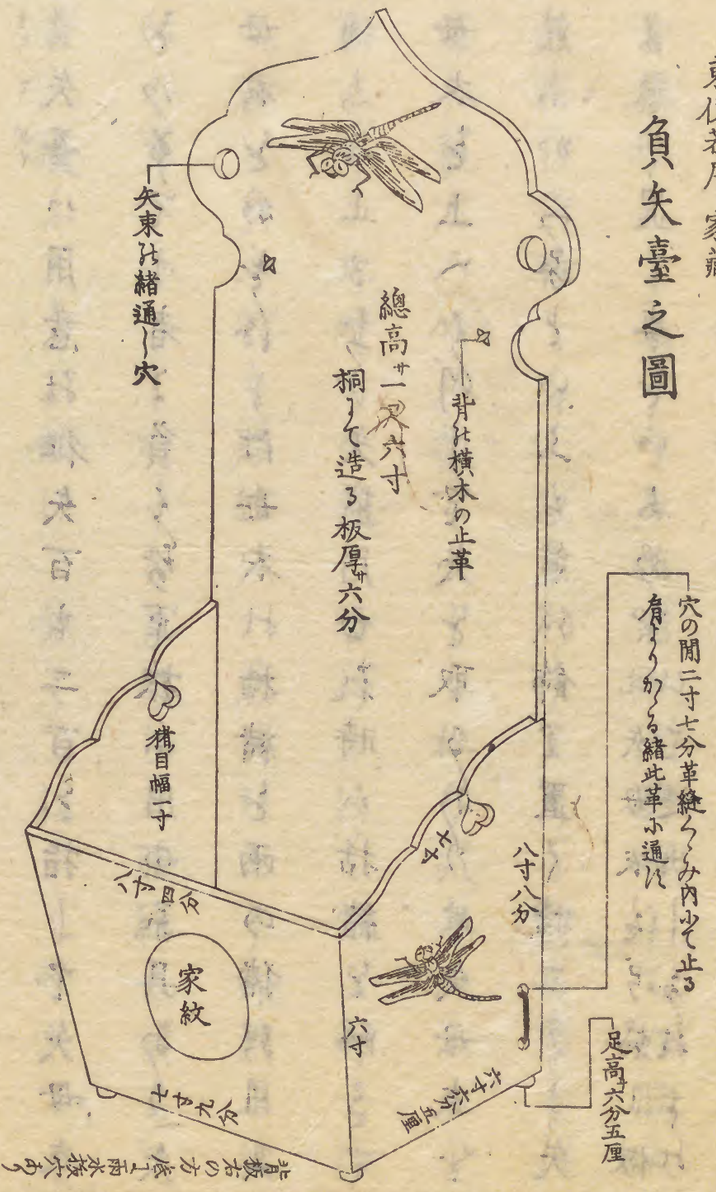
箙に矢母衣をかくるといふ事

負矢臺

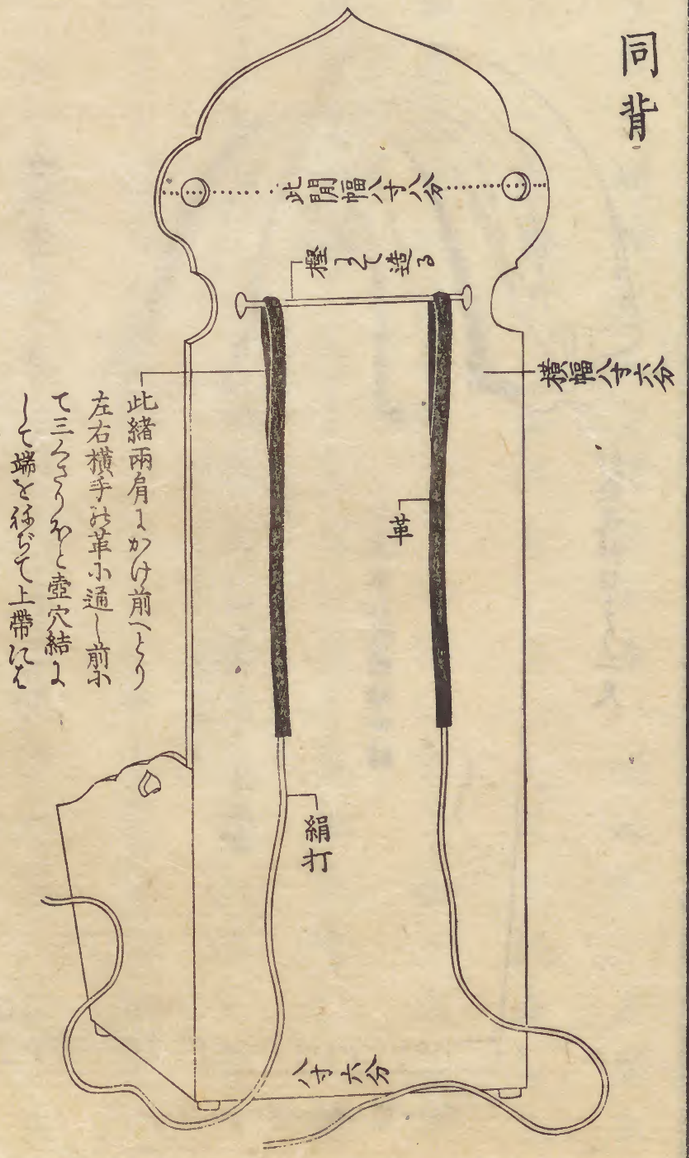
負矢臺（オヒヤダイ）は用意の征矢百も二百を指して矢母衣をかゝ者で小者に負ゝ軍旅に用ゐる具あり矢母衣をかをるは母衣に括緒を両の猪の目み通きて止るあり矢に用ゐる時は括緒を解きて母衣を上へそゞして矢を取るあり此矢母衣を箙にかゝるといふを箙に飾て置く時立きる矢み懸ゝ置く事をいふ形案（此矢母衣を弓袋に倣ひて造出しあれども）ふしきて唯塵埃を除うむゞあ之乃具み しゝて負矢臺も共に中古ゝあ物あり

東使恭居 家藏

負矢臺之圖



同背



負矢臺を製作寸法定法なし好ゝに任ゝべし

矢母衣之圖

長四尺五寸
幅一尺八寸

弓袋ゟ如く〻ゟ製ル薄ク絹を用ゆ但し絹乃内へ母衣骨を入ゞ〻風雨ゟ時ゟ[illegible]

弓器ゟ蜻蛉ゟ表を用ゆる古義

弓器ゟ蜻蛉ゟ表を用ゆ事ハ蜻蛉を一名勝虫といへゞ勝といふ祝意を含て用ゆ義ゟ雄畧天皇四年小野ゟて御獵ゆ[illegible]ゟ天皇乃御臂を蛇刺しゆゟ蜻蛉來ゟ其蛇を喰ひて飛去りゟ天皇蜻蛉を美賞ゟ給ひ御口号ゟあゟ事日本書紀ゟ見えゟ[illegible]ゟ蜻蛉ゟ一名を勝虫と名ゟ其御獵ゆゟ小野を大和國芳野ゟ其地ゟ蜻蛉の小野又蜻蛉ハ瀧おどいゟる舊名遺ゟ

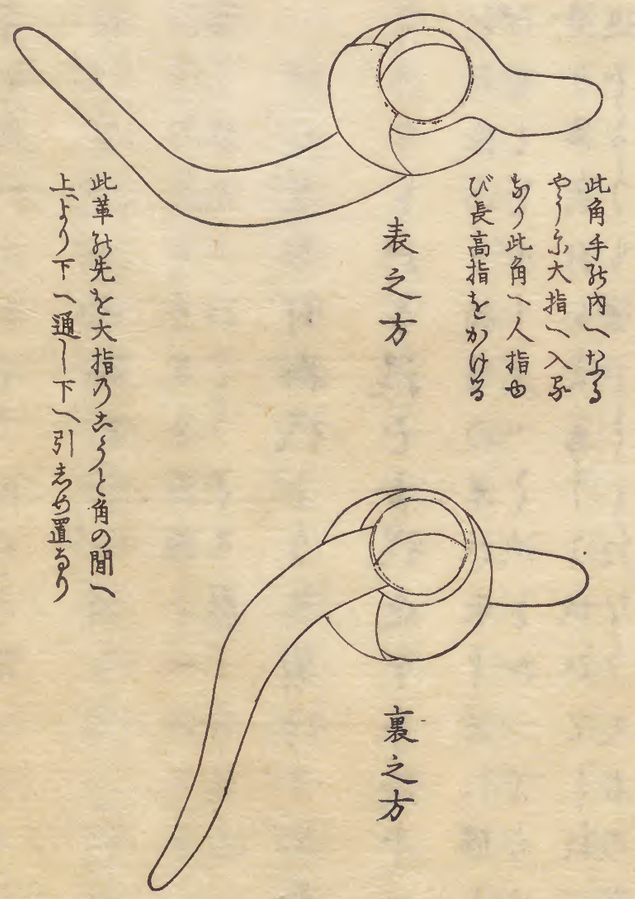
指懸

指懸（ユカケ）ハ太古（イニシヘ）神代をいふ其製ハ第二綏靖天皇ノ御代ヨリ角ノ懸ノ製ヨリ其製鹿ノ角ヲ以テ造リ内ヲエリヌキ大指ヲウケル指ノ次ニ今ノ世ハ朝鮮ヨリ用ヒ来レル懸（カケ）朝鮮カケ（カケツキ）ト云フヨリ異ナルヲ是ヲ後ノ代ヲ弾懸（ハヂキカケ）ヲいフ

角指懸之圖

日本古義四ノ四十九

此角懸ヲ大指ニ指シ出シタル角ヨリ弦ヲ受ケ大指ノ腹ト人指ノ脇ニテ弦ヲカケ矢筈ヲ摘ミ人指長高指ヲ弦ヲ引キ乳角ノ先ヲ握リ引クナリ



此角手ノ内ニカケヤスフ大指ニ入ルナリ此角ニ人指ヲ及ビ長高指ヲカケル

此革ノ先ヲ大指ノ左ノ角ノ間ニ上ヨリ下ニ通シ下ニ引キ置ナリ

雨濕用意の指懸

崇神天皇の御代に至りて始めて革を以て三指の懸を製し其製吉部祕訓抄に圖せる形の指に指しそのかたを是を指懸といふ又上古弓に懸し事ありしにより弓懸とも云也一具

指懸を　神功皇后の御代より其製ありし此懸を手首まきて入るるなれば古代是を手袋をいへ

雨濕の用意ありて指懸の革に表に漆に膠と鷄卵の白實とを少し交へて油を和へて合せうとくと塗り漆氣のあるうに拭ひてくれべし但し十返ぐらいも塗るなり又右の掌に穴を明けあるを手綱又太刀おの後の代に至り自ど持りあるものなりにあるを隨ひ矢束を引く事を主とするなり故に懸の製然り弓長くあるに

指矢とりの本義

もかくるあるに近き世慶長の頃に至りて射禮に武射あるをいはゆる遊興に對をれ花形をけく事とをしに竹林貞次武用の實業を失ふもあるを思ひて此志を心底あ巧ふして此旨を弟子淺岡平兵衛に進めて蓮華王院に於て指矢根矢を射ちしむ指矢とは征矢の事なり箙羽壺に指を矢といふ義なり調度懸に指し矢を懸矢をいふも調度懸の矢と同じ訣あり明月記に建保元年七月廿五日公卿勅使發遣前驅平忠繁左兵衛尉調度懸折烏帽子紫紐革小懸矢弓等如常又花山院忠定卿記に應永三年九月十六日室町入道准后大相國御登山侍二人右近將監橘忠時調度懸烏帽子紫革立衣重藤弓懸矢小紫手革右

衛門尉藤原季行（清上丹下狩弓二所藤懸矢指矢表黒革小矢手革）と見えあり

淺岡一刻ふして始めて五十一筋の矢を射通し
ぬ此時貞次工夫して懸の大指を長く太くして
て革をかぶせて製し其形烏帽子に似あれ
ど帽子といひ習ひあり其後吉田大内藏矢數
の頃帽子に薄き銅を入れて用ひしが後に吉見
經武工夫して銅を重くせしが故に
帽子に角を入れかえあり（吉見臺右衛門經武入道順正を元星野勘左衛門葛西薗右衛和佐大八等が師あり寛永二十年六月朝鮮人旅館に於て季萬戸が強弓を引勝

ある事經武一生の手柄にして誠に吾國弓矢
の外聞といふべし後經武季萬弓を製し且弓法
大全二百八十卷を著述次猶經武一代射藝の物
語を古射雜談に詳に記せり右に云季萬戸が用
ひし強弓并矢但し此矢乃重サ四十二匁あり此矢
を以て一町ばかりと先の的をうけ射るに行
くほどの強弓あり右
弓矢今吉見氏家藏次此角入の四ッ懸を矢數射る
稽古に用ゆる懸にはあ
らざる的射に用ゆる懸には
しかれども此四ッ懸を用ゆれを閑
見えあり大に古義に失へり三ッ懸が懸の本容の
を心得べき第一の要堂射を達者第一の業にして
手乃心が夢習練をべき業にして強矢妻を矢數射
る鍛錬にして自然と出るなり是皆自得の業なり

若孤城兵少くして四方より敵を受るを一日に一萬餘の矢を彈射手其一方より當りて急くふ矢を彈ぬる一人當百の功あるべしけれども今の世に至りてハ矢數を多く通さむ事をのゝ本意なくして射業ハ實業を失ふに至り正朝此事を思ひ往昔の繼掾氏再興して遠矢を射ん射業の邪正を試むるに矢見檢證松井左近へ志願の旨を申出しに即舊例ありよりて宮家より此事みやの藩吉田次郎吉貞吉を以て蓮華王院より於て遠矢を射さしめ繼掾氏再興せり時天保五年甲午四月廿八日なり此上遠矢を射て射業の邪正を考へ鍛錬し事理を嗜まば本意かなふべきなり但し指矢射るとき遠矢射るに差別ありて事色保元乃頃紀伊國藤坂の源太といふ者得長壽院ハ御堂に來りて初め南ハ築地を際芝乃上よりむさぼはりて御堂の軒端ハ下を遠矢ハ射渡し次ハ掾の上をあらうて指矢に射ると保元日記

又見えたり又遠矢に射或ハ指矢に射るを源平盛衰記平家物語等に見えたり案指矢ハは征矢の事なり遠矢を木鋒ハ類を以ふ射るなり

国立公文書館
National Archives of Japan